

## 『The スニーカー』 企画物

あなたのココロが見えちゃうゾ！

スニーカー編集部評価**二次選考通過程度**

原稿用紙換算187枚

南條セトラ著

この作品は、雑誌「The スニーカー」誌上で連載中の、大塚英志のキャラクター小説の作り方というコラムで募集しました。あなたのココロが見えちゃうゾ！」という企画の応募作です。

常設の文学賞ではありませんが、一応、スニーカー編集部の選考の結果、二次選考通過程度という評価を得ました。

第一章 みんなおサルにされちゃうゾ！

なあ、かおりー。

いつまでもビービー泣いてんなよ。

ああー、もう、オレが泣かせたみたいじゃんかよっ！

泣くなったら！

あんないじめっこたちなんか、

いつかきつと、ロケット・ライダーがやっつけてくれる

んだからさっ！

「……ロケット・ライダー？」

お、おう。

こーんなゴーグルと白いマフラーで、顔、かくしてて…

ジエットで飛べる靴と、まっ赤なマントでさ。

悪いヤツを、ぎったんぎったんにノシちゃうんだぜ？

「ほんと？」

ぜったいのぜったい！

ロケット・ライダーは、宇宙一、強いんだ！

かおりが泣いてるときは、

ロケット・ライダーがたすけに来てくれるからさ！

だから、もう、泣くなよ。

な？

ぼかぼかと暖かな日差しが、窓際の席の生徒たちの安眠を誘っていた。

春の陽光に護られた三時間目は、まるで母親の子宮に戻ったような寝心地の良さだ。

国枝香織は、子供の頃の夢をみながらまどろんでいた。

いつか、香織が泣いているときは助けに来てくれるとあの子が言っていた。

ロケット・ライダー……。

そんなことを言っていたのは、確か、近所に住んでいた男の子だったような気がする。

でも、その子が誰だったのか、香織は思い出せなかった。

腹減ったな。坂野くん彼女いるのかな？ ちくしょう  
禿先公ぼっくりいかねえかな さんえつくすぶらすよんわ  
い…… だー眠い あ、シャーペンの芯折れちゃった 委  
員会さぼっちゃおうかな もぐもぐもぐ…… 部活のあと  
七海とへっへっへ…… やだ、おなら出そう えつくすい  
こーる…… 次、体育だ 焼きそばパンまだ売り切れてな  
いかなあ やっぱり演歌だぜえ みっちゃんとブルーベ  
リータルト食べよ マニキュアはがれちゃった 俺、足く  
さくないかな？ 消しゴム消しゴム 最悪、木田の肩にフ  
ケ！ ぐーぐーすやすや 遠い宇宙からきつと僕を迎えに  
来てくれるんだ…… サイテー、枝毛なってるじゃん マ  
マのお弁当早く食べたいな。きしし、佐田のブラウス透  
けてやんの…… ママだってよ…… 佐田のブラ見えてん  
のか？ 電波入ってるぜ いやらしい目でみないでよ！  
え？ あれ？ 誰だ？ 屁こいたの…… 変だよ やだ、  
あたしじゃないよ わしはまだ死なんぞ！ これ、変だつ  
て 俺じゃねえよ なに考えてんのよ？ これなに？ マ  
ジかよ？ なんだよ？ どっいつこと？ なんでわかる  
の？ 誰が考えてるの？ ぐーぐーぐー うわ、気持ち悪  
い 誰の考え？ あたしじゃない 俺の考えを読むなあ！  
嫌だったら！ 頭の中ぐちゃぐちゃだあ ぱんくす  
るううう！ うわっうわっわ 「これは宇宙の意志だね……  
るせーな、電波野郎！ 罵らないで！ もうこんなの  
嫌っ！ たすけてくれえ！

「へっくしっ」

香織は、くしゃみをひとつして鼻をすすりあげた。花粉症ってヤツにかかって以来、授業中の居眠りさえままたない。目が猛烈に痒くて、香織は指で目をこすった。愛用の目薬を、ついさっき切らしてしまったのだ。放課後、薬局に寄って目薬を買わねば目も開けられない。そんなことを考えながら、黒板に板書し続ける世界史の教師の後ろ姿を見た。黒板には、ロシア革命がどうか、ボリシェビキがどうか、延々と書き記されている。

香織は、大きなあくびをした。涙で目が潤って、少しだけ痒みがましになった。

と、そのとき。唐突に、壁一枚隔てた隣のクラスで、叫び声が上がった。

「たすけてくれえ！」

その声を合図に、堰を切ったように、皆がぎゃあぎゃあど騒ぎ始める。どれもこれもが鬼気迫るといった感じの叫び声だ。

つまらない授業に飽き飽きしていたクラスメイトは、みんな、驚いて顔を上げた。

黒板の向こうにある別の空間で起こっている何事かを、注意深く見極めようとしていた。

「あー、君たちは、自習していなさい」

世界史の日野が、指示棒を握りしめたまま注意深く廊下に出た。

「ねえ、礼二郎」

隣の席につっつぶしてだらしなく寝こけている礼二郎の脇腹を、香織は定規でつついた。

「いやん」

変な声を出して、礼二郎は身をよじる。

ガクツとずっこけて、香織は丸めた教科書で礼二郎の頭をスパンと叩いた。

「気色悪い声出さないでよっ！」

礼二郎は、もそもそと叩かれた頭に手を持っていき、冬ごもりの動物が雪解けで首を伸ばすように緩慢な動作で顔を上げた。口の端に、白くカピカピになったスジがついている。

「ヨダレ」

香織は、冷たく言った。

「え？ ああ、うん」

礼二郎は、制服の袖で口許をぬぐう。

香織は、ほんのりテカっている礼二郎の袖口を見て、毎日そこでヨダレをふいているのだからかと、うんざりした。「なんか、叫んでない？ 隣のクラス……」

眠そうな目をこすりながら、礼二郎はのほほんと言った。叫んでない、どころか、机が倒れる音やら、何かが壊れる音やら、ののしり合う声やらで、メチャクチャやばい状況だ。既に、先生が何人もかけつけて、これを制圧しようとして大声で怒鳴っている。

だけどそんなことで収まるような騒ぎじゃなかった。

ガツシャーン！ 音に驚いて窓から外を見ると、隣のクラスの窓から椅子が飛んでいった。椅子は下の花壇に落ち、そのあとを追うようにキラキラと虹色の破片が落ちていく。うわあ、綺麗……。

陽光を浴びて、輝きながら散っていくガラスの破片はとても綺麗だった。でも、わずか壁一枚隔てた向こうで起こっていることを考えると、そんなことは口に出せなかった。

クラスの中は、小声でこの事態について話し合うくらいで、思いのほか静寂である。

静かなのは、みんな怖かったからだ。

突然、隣のクラスが猛獣の檻になってしまったような気がした。しかも、動物園の檻には鍵が付いているけれど、学校の教室の扉には鍵なんかない。今、隣のクラスで叫んでいるやつらが、怒濤のようにこのクラスにも押し入って、暴れ回るかもしれないのだ。

みんながみんな、イザというときには逃げだそうと注意深く状況を見守っていた。

「うわあ。綺麗だねえ」

いつものまに横に来たのか、礼二郎が香織の隣で虹色に輝くガラスの破片を見て顔をほころばせていた。いつものようにのんびりした口調で、香織が心の中で思ったけど口には出せなかったことをさらりと言っ。

香織は、肘で礼二郎をこづいた。

「あんたね、まったりしてる場合じゃないのよ。わかってる？」

コクコクとうなずいて、礼二郎は笑った。サラサラの前髪が丸いフチのメガネにかかっていた。ほんのり紅潮した頬が、つるつるで赤ちゃんのほっぺのようだ。香織は、不覚にも、その笑顔を可愛いと思ってしまった。隣のクラス

が酷い状況なのに、母性本能くすぐられている場合じゃないのは百も承知だ。

「あ」

礼二郎は、ほわほわした笑顔をひっこめ、耳をそばだてた。

「救急車」

礼二郎がそう言うと、香織の耳にもピーポーピーポーという独特のサイレンが聞こえてきた。しかも、隊列を成して道路を疾駆してくるような、絡まり合ったサイレンだった。その壮絶な音に、じっとしていられなくなったクラスのみんなが、窓際に押し寄せた。

校庭に、回転灯をぐるぐる回した救急車が、次から次へと走り込んでくる。まるで映画の撮影でも見ているようだった。

担架を抱えた制服の人たちが学校にドツとなだれ込んできた。

彼らが持っているのは、二つ折りにして運べる屈折式担架だ。その様子を見て、なんだかジェラルミンの盾を構えた機動隊の強行突入みたいだな、と香織は思った。

救急隊の突入で、隣のクラスがいちだんと賑やかになった。

「ぼく、おしっこ、行ってくる」

礼二郎はモジモジしながら切なそうに言って、ひよこひよこ廊下に出ていった。

この緊迫した異様な状況ではトイレが近くなるのも無理はない。香織も、なんだかもよおしてきて、さんざん迷った挙句、廊下に出ることにした。

そつと廊下に出ると、先生たちが21Bの教室を隔離するように立ちふさがっていて、その向こうのトイレにたどりつくのは不可能だと思われた。

困っていると、礼二郎が先生の脇をくぐり抜けてこちらに戻ってくるのが見えた。

「やだ、礼二郎、そんな堂々と……」

香織は、焦って礼二郎を手招きする。

礼二郎は、天然の笑顔で笑った。

「香織もおしっこ？」

ガクツと香織は脱力する。

花も恥じらう十六歳の乙女に、「おしっこ」はないだろうと気が滅入ったが、相手が天然寝ボケの礼二郎では怒ってもしかたがない。そう。いつも居眠りをしている礼二郎は、

天然ボケならぬ、天然寝ボケと呼ばれているのだ。

礼二郎は、ニコツと笑うと香織の腕を掴んだ。意外なほどの力で、強引に先生のバリケードまで香織を引っ張っていく。

「せんせえ〜」

情けない声で、礼二郎は、さっき、脇をすり抜けた体育教師に声をかけた。

香織は、心臓が縮み上がった。

「国枝さん、おしっこ漏れそうなんですって〜」

ぎゃ。心の中で悲鳴を上げ、香織は体育教師を見上げて情けなく愛想笑いをした。

「なんだ、しょうがないな。さっさと行ってくるんだぞ」

ね？ という顔で香織に微笑んで、礼二郎はさっさと教室に戻っていった。

香織は、体育教師の脇をくぐって、問題の教室の前を壁にへばりつくようにして進んだ。

横目で教室の様子をうかがう。獣の檻のような声がかつていた教室も、救急隊の突入で、いくぶんトーンダウンしているようだ。

でも、ちらつと見えた教室の中は、惨憺たる状況だった。

机が倒れ、重なり、教室の隅に積み上がっている。椅子と鞆、文房具などが無惨に散乱して、その、机のジャンゲルジムの中に挟まるようにして、何人も生徒が気を失っていた。

屍累々……。そんな言葉が浮かんで、香織はブルツと身を震わせた。

あまりに身がすくんだので、なにもないリノリウムの床でつまずいた。前につんのめってコケて、したたかに膝をうちつける。

「ったー……」

焦って立ち上がったって、反対側の廊下を封鎖している数学教師の脇をくぐり抜けた。

パタパタと廊下を駆け、トイレに飛び込む。一目散に個室に駆け込んで、衣服に手をかけたとき、左手に何かを握りしめていることに気が付いた。

「あれ？」

驚いて手を開いてみると、小さなイチジク型の容器だった。ラベルには、目玉をハートにデザインしたような絵が描いてある。蓋がネジ式になっていて、中に入っている透明な液体は、容器をほんの少し押すことよって一滴ずつ

落ちてくる仕組みだ。いわゆる、香織のよく知っているところの「目薬」といったものの形状に酷似していた。

香織はひどい花粉症で、とにかく目が痒かった。それで、薬局に流通しているありとあらゆる種類の目薬を試している最中だった。

隣のクラスがあんな状況になってしまって、正常な判断能力が麻痺していたのだろうか。普段は、そんなアヤシゲなものは、絶対に自分の目に使ったりはしない。

けれども、香織は、目の痒みに耐えかねて、手に握りしめていたその謎の目薬を自分の目にさした。

「くっく」

今朝から目をこすりつづけていたので、角膜に傷が付いている。目薬は、ことのほか痛烈に目に染みた。でも、重度の花粉症患者にとって、目が潤い痒みが引く快感は、既にドラッグのそれに近いモノだ。

「きもちいー」

誰もいないのをいいことに、トイレの個室から聞こえたらアヤシイだろう言葉をつぶやいて、香織はその目薬を制服の胸のポケットに落としこんだ。

すっきりさっぱりしてトイレから出た香織は、教室に戻ろうと再び先生たちがバリケードを作っている廊下に出た。

オサルニナールを捜せ……。

「は？」

変な言葉が聞こえたような気がした。

オサルがどうした？ 香織は失笑した。動物園の檻みただと思っていたから、21Bの前でおかしな幻聴を聞くのだろうか。

香織は気にせず、数学教師の脇を申し訳なさそうな顔をしてぐぐり抜けた。

を。胸の谷間が見えるじゃないか……。

「え？」

反射的に先生を振り仰いだ。

な、なんだ？

香織は、頭の中で響く声に当惑した。

まじまじと先生を見つめてしまったので、焦って顔をうつむけ、廊下の壁際を走る。

反対側の体育教師の脇をすり抜けた。

おしっこか……。へへへ……。

なに、これ……？

香織の心臓が、バクバクと口から飛び出そうな大きな音

をたてて鳴り始めた。

もしかして、この先生の、心の声……？

異常な状況の異常な事態には異常な考えがつきものだとんでもないことを考えつく自分に、香織は驚いた。

なんだ？ 俺に気があるのか？

茫然と体育教師を見つめている香織の頭に、また、声が響く。

「ないです！ ないですっ！」

慌てて叫んで、香織は自分の教室に飛び込んだ。なにがなんだかわからなかった。

教室に戻って自分の席に座ると、ほどなくして担任が教室に入ってきた。原因はわからないが、おそらく集団ヒステリーだろうと先生は隣のクラスの状況を説明した。大事をとって全員が入院し検査を受けるのだそうだ。

そんな説明を、香織は上の空で聞いていた。ときどき、頭の中に変な声が聞こえる。それは、さっきみたいに体が触れ合った人の声と、忌々しく耳について離れない『オサルニナールを捜せ』という声だった。

香織は、動揺をおさえて必死に考えた。

隣のクラスの前を通過してトイレに行ってから、この変な現象は香織の身に降って湧いた。

多分、触った人の心の中で考えていることがわかるのだ。

ためしに、前の席の美咲の背中をつついてみた。

やだなー。早く帰りたいなー。

美咲の声だ。やっぱり間違いない。どうしたわけか、香織は他人の考えていることがわかるようになってしまったのだ。

だが、説明がつかないのが、今も断続的に響く「オサルニナールを捜せ」という声である。あれは、誰の声だろう……。命令するような、深層心理に刷り込もうとするような、不思議な響きの声だった。

先生の説明のあと、この日は、一クラス全員が心神喪失状態で入院という事態で生徒たちも動揺しているとのことで、全校生徒が午前中で下校となった。

先生たちも、警察やら病院やら父母との対応で忙しいし、善後策を講じるために職員会議も開かねばならない。そんなわけで、大忙しとなった先生たちにかわって、生徒たちの対応には、生徒会が当たることになった。香織は生徒会の書記なので、急いで生徒会室へ行くこうと身支度を整えて廊下に飛び出した。

廊下を少し行くと、生徒会長の麻生礼一郎とでくわした。礼一郎は、すらりと背が高くものごしもやわらかで、密かに香織が憧れている先輩だった。同じクラスでいつも居眠りをしていて天然寝ボケの麻生礼一郎と名前が似ているので、最初の頃、実は兄弟ではないかと騒がれたが、ぜんぜん関係ない真っ赤な他人だ。

「君に頼みたいことがあるんだ」

甘いマスクと甘い声で礼一郎は囁いた。香織は二つ返事でうなずくと、そのまま礼一郎のあとについていった。

礼一郎は、屋上に通じるドアの鍵を持っていた。生徒の安全対策のために、普段は屋上は使用できなくなっている。

礼一郎は鍵を開け、屋上へ香織を導いた。

香織は、なんで屋上なんだろうと思って、ちょっと礼一郎の腰のあたりを、ぶつかつたふりをして触ってみた。突然、他人の心が見えるようになって動揺しているはずなのに、ちゃっかりその能力を使おうとするところが香織の大胆なところだ。

もつとも、「オサル」という声以外は触つた相手の心が見えるだけで、誰にも触らなければ普段と変わらないのでそう特別なことになったとも思えなかった。今は、香織個人におこつたことよりも、隣のクラスの状況のほうが特別で大変なことだったのだ。

ぞぞぞぞぞ……

あれ？　と思つて、香織は礼一郎に触れた左手をマジマジと見た。

なんだか、深夜、放送が終了したあとのテレビのようなザーというノイズが聞こえたような気がした。

試しにもう一度、ふわつと礼一郎の背中に触れる。

ぞぞぞぞぞ……

同じだ。

香織が内心、変だなと思つてみると、香織の前を歩いていた礼一郎が口許に冷笑をうかべて振り返つた。その、いつもと違う酷薄な笑みに、香織の背筋はゾクツと震える。

「残念だったね、国枝さん」

礼一郎は、冷たく言い放つた。

「な、なに？」

「ぼくの心は読めないよ」

「えっ？」

香織は、思わず後ろにあとずさつた。

心を読もうとしたことを見透かされ、香織の心臓は早鐘

のように脈打った。

「実験に使ったココロミエールがひとつ足りないんだ、持っているのは君だね？」

礼一郎は冷たい笑みのまま言った。

「ココロミエール？」

香織は反問する。

「ほら、これだよ」

礼一郎はポケットから小さな瓶を取り出して香織に見せた。

香織はハッと息を呑む。それは、香織がいつのまにか握りしめていたあの目薬だった。

そもそも、あの目薬は、どうして手の中にあっただろう。そういえば、さっき、21Bの前で派手に転んだ。転んで手をついた時、手元に落ちていた目薬を偶然掴んできってしまったのだろうか。

「な、なんなの？ それ」

内心の動揺を悟られまいと、香織は必死に平静な声を出す。それでも語尾が少し震えた。

「もうわかってているだろう？ 他人の心が見えるようになる目薬だよ。これを使って、我々ナナバが開発した人間を猿に変える薬オサルニナールを捜させようとしたんだけど……。人間ってのは不便なものだね、せつかく心が見えるようにしてやったのに、パニックを起こして、あの有様だ」

「パ、パニックって……21Bの騒ぎは……」

「そう。このココロミエールを花粉症目薬の新薬だと偽って、ちよっと試して貰ったんだ。勿論、抗アレルギー作用もあるから花粉症にも効くんだけどね」

そう言われてみれば、香織も目の痒みが止まっている。

「だけど、君は目薬に耐性があるのか、少しばかり反応が違うようだ。そこで相談なんだが、君はこのココロミエールを自由に使ってもかまわない。そのかわり、盗まれたオサルニナールを探し出してはくれないか？」

「盗まれた？ オサルニナールって、なに？」

礼一郎は、哄笑した。

「言っただろう？ 人間を猿にする薬さ。人間を猿に変え、完全に服従させて、我が秘密結社ナナバが世界を征服するのさ！」

はははははー！ という笑い声が、香織の耳について離れなかった。

なにがなんだかわからなかったが、礼一郎がそのナナバ

の一員であることと、そんなばかげた組織が存在するらしいことはよくわかった。

それに、あの声は……。あの、「オサルニナルを捜せ」という声は……。

この麻生礼一郎の声だ。

香織は、礼一郎を睨み付けた。

「嫌よ」

「は？」

高笑いがピタリと止まる。

「今、なんと言ったかな？ 国枝香織」

「嫌だと言ったの！ なぁにがオサルニナルよ！ そんなセコイ秘密結社の手先になんかならないわ！」

勢いに任せて言い放って、香織はぜえぜえと息を整えた。

「ふうん」

小馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、礼一郎は、香織に向かって手を伸ばした。

「じゃあ、しよーがないねえ……」

香織に向かって伸ばされた右手が、ガシッと彼女の細い首を掴む。

香織は慌てて身をよじるが、恐ろしい力で締め上げられ、どうすることもできなかった。

「や……たす……け……」

香織は、苦しいノドの奥から必死で声を絞り出す。

しかし、礼一郎は無情な台詞をさらりと言った。

「秘密を知られたらどうなるか、わかるよね？ 死んでもらうよ」

憧れの先輩だったのに……。どうして生徒会長が？

「ロミエールでも心の読めない礼一郎は何者なの？ 秘密結社ナナバって？」

息が詰まって、頭がぼうつとしてきた。

『かおりが泣いてるときは、ロケット・ライダーがたすけに来てくれるからさー！』

消えそうになる意識の片隅で、あのとときの少年のあどけない声が蘇った。

そんなばかなこと、あるわけないのに……。

香織は、苦しい息の下、そんなことを思いだした自分を嗤った。

その刹那。

突然、香織の首を締め上げていた礼一郎の右手が離れた。

香織は、ペタンと屋上の床にすわりこむ。

急に息ができるようになって、香織は、酸素を求めて水面でパクパクする金魚のように大きくあえいだ。

締めつけられていた首をおさえて目を開くと、少し離れたところに礼一郎が倒れていた。

何が起こったかわからず辺りを見回すと、給水タンクの陰から、赤いマントと白いマフラーをなびかせ、ウルトラマンみたいなヘルメットとゴーグルを身につけた変てこりんな人影が現れた。

人影は、その手にY字型をした武器らしきものをしつかりと握りしめ、戦隊もののヒーローが登場するときのような無駄な動作をしてから、ピシッとキメポーズをとった。

「ロケット・ライダー、推参！」

……推参……って……。

香織は啞然とした。

秘密結社の次は変身ヒーローの登場だ。

あまりの展開に、香織はその場にへたりこんだまま事の成り行きを見守るしかなかった。

倒れた礼一郎は、むっくりと起きあがり、首のあたりを撫でさすった。

礼一郎が撫でたあたりを見て、香織はギョツとする。火花が散っていた。礼一郎の右耳の下の第二頸椎あたりから、なにやら尖った物体が覗き、そこが蒼白くスパークしている。

「観念しな！ 01郎！ 今、スペシャルボンバーパチンコで撃ち込んだのは、速攻爆裂ウイルス弾だ！」

スペシャルボンバーパチンコ……。

速攻爆裂ウイルス弾……。

強いんだか弱いんだかわからないようなネーミングの武器の名を高らかにアピールし、謎のロケット・ライダーは胸を張った。

「オサルニナールはここだぜ？」

ロケット・ライダーは、赤いラベルに猿の絵がプリントされたドリンク剤をかざして誇らしげに言った。

「このプロトタイプがないと量産できないんだってな。こんなもの、こうしてやる！」

ロケット・ライダーは、手にしたドリンク剤の瓶を床に叩きつける。パンという音を響かせて、オサルニナールは

床の染みになって広がった。

「き……さ……ま……」

対する礼一郎はギギギといった効果音が聞こえそうなほど緩慢な動作で、両手をロケット・ライダーに向けて差し上げた。

香織の胸に嫌な予感が走る。

さつき、首を絞められたときの力は、とても人間のものとは思えなかった。それに、心も読めない。

生徒会長は、人間ではないのだろうか。

だとしたら、あのロケット・ライダーに向けられた指は

……。

子供のころに見た、ロボットの出てくるアニメーションを思いだした。ああいうポーズをしたら、たいていの場合

……。

香織がそう思った瞬間、礼一郎の指が、バシユバシユバシユ、と火花を吹いて飛んだ。

「きやあっ！」

十本の指が、ロケット・ライダーを襲う。

パンパンパン！

ロケット・ライダーは懐から取り出した宴会用……：にしが見えないクラッカーを、続けざまに破裂させた。

キラキラキラキラ……。

七色に光るホイルが、そよぐ風に乗り屋上いっばいに広がって光り輝いた。

さつき見た割れたガラスが飛び散る様のように、その美しさは、幻想的でさえあった。

すると、礼一郎の指ミサイルが、とたんにヨロヨロと目標を失ったようにどこかへ飛んでいつてしまった。

どんな魔法を使ったのか香織にはわからなかった。実は、これは、戦闘機などで使われる電波の反射材、チャフと同じ原理だ。

ロケット・ライダーは、タンと床を蹴って飛ぶ。靴に仕掛けられたジェットが唸った。

ロケット・ライダーは、勢い良く礼一郎、いや、秘密結社ナナバの工作ロボット01郎に、強烈な蹴りを喰らわせた。

蹴りをまともに喰らった01郎は、ブルブルと全身を震わせた。

ロケット・ライダーは、スタンと片膝を曲げて着地すると、01郎の様子を見てハツとしたように香織に向かって

駆けてきた。

「香織っ！ 伏せろっ！」

どうして自分の名前を知っているのか、そんなことを疑問に思う間もなく、赤いマントをなびかせたロケット・ライダーが目の前に迫ってきた。その背後で01郎が光る火球になって爆散する。

ロケット・ライダーに押し倒されるようにして、香織は屋上の床に倒れ込んだ。

恐ろしい爆発音が脳髓までビリビリ響く。

香織……………香織……………香織……………

香織は、ロケット・ライダーに護られて身を伏せたまま、彼の心の中に響く自分の名前をどこか懐かしい想いで聴いていた。

## 第二章 妖しいグルメになっちゃうゾ！

「バックします。ピーピー。バックします……………」

日曜の朝っぱらから巨大なトラックの「バックします」という人工音が響いていた。

香織は窓際に置かれたベッドの上で、うだうだと毛布を抱き込んだ。美咲と今話題のクレープ屋さんに行く約束したのは十一時だ。まだ、たっぷり時間はある。

少しでも長い時間、惰眠をむさぼろうと布団に頭から潜り込んだとき、聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。

「あ……………。それは、こっちお願いします……………。あ、やっぱ、こっちがいいかなあ……………。いやまてよ……………」

香織は、ガバツと跳ね起きた。

この間延びした、ボケボケした口調。イライラするような天然寝ボケの優柔不断さ。

香織は、出窓のカーテンを引き開けて、窓におでこをくつつけるようにして外の道路を見下ろした。サラサラの少し茶色い頭のとっぺんに、ちょこんと巻いた無防備な旋毛をさらけ出して、そいつは居た。

香織は、衝動的に窓を開け放った。

「ちよっと！ あんた、そんなところでなにしてんのよっ！」  
安眠を妨害されたせい、思いのほかキツイ口調になった。

「あ……………。香織だあ……………。おはよ……………」

くるんと上を見て、天然寝ボケの礼二郎はひらひらと手

を振った。

香織だあ、もないものである。

「だから、そんなところでなにしてんのって訊いてんだけど！」

「あ………」

上を見上げたままへらへらと笑った礼二郎は、何事か答えようとして身を仰け反らせた。そのままふらりとよろめき、その場にストンと尻餅をつく。

「あ、あれれ？」

「なんつて……ばか！」

香織はやれやれとため息をつく、ボタンと窓を閉め、手近なトレーナーとGパンに素早く着替えて部屋を飛び出した。

香織が着替えをして部屋を出、階段を下りて玄関から外に出てくるころ、地面に尻餅をついていた礼二郎は、ようやくノロノロと立ち上がったところだった。

「転んじやった………」

まさに寝言のようにつぶやいた礼二郎を見て、香織はやれやれと首を振った。

「ところで、この荷物、なんなのよ？」

香織はイライラと側面に大きな数字が書いてある引越シトラックを指さした。

「ああ、ぼく、ここに引越してきたんだ」

「引越しい？」

香織の声がオクターブ跳ね上がる。

「香織こそ、なんでここにいろの？」

「って、あんた、日曜の朝にあそこの出窓からパジャマで顔を出すってことは、どういことだか考えなくてもわかるでしょうっ！」

礼二郎は、くりくりと首をかしげる。

「……同棲？」

礼二郎は上目遣いに言った。

「ボゴッ！ 考えるより早く、香織の「ぐー」が、礼二郎の顎に炸裂した。

「ぐが」

「ここがあたしの家なのっ！ ばかなこと言わないでっ！」

香織は、腰に両手を当てて仁王立ちだ。

「香織い、機嫌わるすぎだよ」

涙目になって顎を押さえ、礼二郎はふにゃふにゃと泣き

言を言った。そんなポーズでうるうるされると、香織の心はチクンと痛む。なんたって、この礼二郎、顔が可愛いから始末に負えない。しかも、香織好みと真ん中のファニーフェイスだ。

うるうるとうるんでいた礼二郎のメガネ越しの大きな瞳から、ポロツと大粒の涙がこぼれ落ちた。

香織は、礼二郎の顔を見ないよつにくるつと背中を向け、ずんずんと自分の家の玄関に向かって歩いた。なんだか、今朝は、メチャメチャ機嫌が悪かった。そもそも数日前に学校で起こったあの事件からこつち、気持ちが悪くないのだ。正直いって、昨夜もあまりよく眠れなかった。ロボツトだった生徒会長、麻生礼一郎の右手が首に絡みついて、締め上げられるような悪夢を何度も何度も見た。

怖かった。秘密結社ナナバの秘密を香織が知っていることがわかったら、きつとまた狙われるに違いないと思った。そんなこんなでイライラしているのに、朝っぱらから引越騒動だ。しかも、越してきたのは天然寝ボケの礼二郎。

麻生礼二郎……。ふと、その名前を反芻して、ゾクリと背筋が凍った。

あの生徒会長の名は麻生礼一郎といった。既に生徒会長と寝ボケの礼二郎は兄弟ではないと学校では証明されたはずだったが、他人の心が読めてしまうような薬を開発できる組織ならば、身元を誤魔化すくらい簡単かもしれない。

この時期に、香織の家の隣に越してくるなんて……。香織を見張る目的のナナバのエージェントだろうか？

もしかしたら、礼二郎もナナバの一員？

あの、天然寝ボケの礼二郎が？

食事中もそんな疑惑が頭の中をぐるぐるして、香織は朝御飯がどこに入ったのかわからなかった。

十一時に小泉通りで美咲と待ち合わせしているので、香織は十時前に家を出た。

外にはもう、引越トラックの姿はなく、隣の三階建ての小振りなワンルームマンションの三階のベランダに、あの、サラサラの茶髪が見え隠れしていた。

礼二郎はナナバのエージェントだろうか？

このあいだの学校の事件の時手に入れたココロミエールは、いつも鞆にしのばせていた。

確かめたければ、あの目薬をさして礼二郎に触れてみればいい。いつも無防備な礼二郎に近づくことはたやすいの

だから。

でも、香織にはそれをする勇気がなかった。もし、礼一郎のときみたいにノイズ音が聞こえたらと思うと、怖くて怖くてたまらなかった。本当のことを知るのが怖い。あの、いつだってのほんとして礼二郎が、本当は別のことを考えているなんて思いたくもなかった。間抜けで、たよりになげで、どこかネジが外れているからこそ、香織も遠慮なくポンポン言ったりできるのだ。

礼二郎……。

後ろ髪を引かれるような思いで、美咲との約束を果たすべく駅への道のりを急いだ。

香織は、電車を乗り継いで小泉通りまで来た。日曜日の小泉通りは縁日のような人出だ。でも、この通りのなかほどのクレープ屋さんが今、学校では大評判だった。

香織は、美咲と改札口で落ち合い、はぐれないように小泉通りの人波を泳ぎだした。

「すっごい人お〜」

美咲は、うんざりしたように言った。

「いつもよか多いよね、そのクレープ屋さんのせいかな？」

香織も、うんざりしたように言う。

噂のクレープ屋にたどり着くと、遙か彼方のほうに「行列最後尾」と書かれたプラカードが見え隠れしていた。

「え〜？」

二人は同時にため息をつき、互いの顔を見合わせると、意を決して「行列最後尾」のプラカードを目指した。

結局、一時間近く並んで、やっとのことで目当てのクレープをゲットすることができた。既にお昼を回っていたので、めちやくちやお腹がすいていた。

ファッションビルの前の小さな噴水が吹き上げる広場のベンチに、香織と美咲は並んで腰を下ろした。見ると、周りに座っているカップルも、親子連れも、おじさん二人の妙な組み合わせの人たちでさえ、香織たちが抱えている包みと同じものを持っていた。

黄色を基調とした、おしゃれなデザインの小箱だ。ティクアウト用の箱だった。

ご多分に漏れず、香織もティクアウトを注文した。せつかく二時間も並んだのだから、この場で食べるぶんだけを買うのはもったいない。美咲も勿論、同じ箱を持っている。

香織は、黄色に赤いリボン模様がついた箱をかかえ、ク

ルームのたつぷり乗ったバナナクレープをかじった。

「うっわー」

びっくりして、香織は思わずマジマジとクレープを見つめた。

「メチャ美味だよ、これ……」

美咲も驚いたように同意する。

二人は、ガツガツと夢中でそれをたいらげた。女子高生の常として、色んな噂の店に出向いたが、これほどのアタリに遭遇したのは初めてだった。

「ところで、そのクレープ、誰へのおみやげ？」

ウインドウショッピングをしながら、美咲が香織に訊いた。

「え？ 誰……って」

思わず香織は答えに窮する。

「香織、好きな人のこと教えてくれないんだもん。だけど、クレープ四枚買ったでしょ？」

香織はギクツとする。美咲は目ざとい。

「お母さん、お父さん、自分でもう一枚……。香織、兄弟いなかったよね？」

「さらに自分でもう一枚……」

美咲は不審な目で香織を見た。

「あっやしい〜」

「な、なによお。もう……」

拗ねたフリをして香織はごまかしを決め込んだ。本当は、帰ったら礼二郎に差し入れてあげようと思っていたのだ。

あの、ボケボケした礼二郎のことだ。きつとろくなものを食わずに荷物の片づけをしていることだろう。

「あっ」

突然、美咲が、夏物のスリッパドレスを物色しながら声を上げた。

「そういえば、香織って、あの居眠り少年と仲良しだよね？」

ギクギクツ。

香織は、あのいつもボーッと寝ている、冴えないクラスメイトのことがちょっと気になっていたりということは、誰にも知られなくなかった。礼二郎が可愛い、なんて言おうものなら、たちまちみんなにばかにされるに決まっている。

「やだ。仲良くなかないよ」

「そう？ ならいいけど……。あいつだけはカンベンって

感じだもんね」

「やっぱり……。香織は胸の奥のドキドキを押し隠して訊いた。」

「なんで？」

「だってー。普通、高校生にもなってヨダレたらして寝る〜？ いっつもボーっとしてシャキッとしないしさ、体育なんかボロボロでしよう？ クラスの男子からも髪の毛引つ張られたりしてるし。それでも、ヘラヘラ笑ってるんだもん、気色悪いよ」

「そ……れは、ちょっと酷いんじゃない？」

「は？」

「言ってしまったから、香織はしまったと思った。」

「やだー。もう、香織ったら、やっぱりいー」

「うりうりと、ひやかすように、美咲は香織を小突く。」

「ばか言わないでよ。あんな天然寝ボケ男」

美咲は、クスクスと笑った。

「そっかー。香織は、ほっとけないタイプが好みなんだ」

「んなことない。ぜったいない！」

強く断言して、香織は自分自身にもそう言い聞かせた。

香織は、家に戻って家族の分のクレープを置き、自分の分と礼二郎の分を持って隣のマンションに出向いた。

三階、南向き。ワンルームとはいえ、家賃はそう安くはないだろう。ワンルームということは、彼が親と離れて一人で住むということだ。そんなに裕福な家庭のボンボンなのだろうか。だから、あんなにボーっとしているのだろうか。

それとも……。ナナバの作業員だから、お金の心配なんかない……。とか……。

また、そんなことを考えてしまっただけで、香織は辛くなった。

ピンポン。思い切って呼び鈴を押す。

しかし、返事がない。試しに力チャと玄関のノブを回してみると、ドアは簡単に開いた。

「礼二郎？ いないの？ 鍵かけないと物騒だよ？」

部屋の中に向かって声をかける。狭いワンルーム、部屋に居れば聞こえるはずだ。

香織は、そろっと玄関に入り、中を見回した。段ボールの箱の間からピンク色の靴下が見えた。ピンクとオレンジのシマシマだ。なんて色の靴下をはいてるんだ……。と思いながらそっと歩み寄った。段ボールの箱の向こうをのぞき

込むと、段ボールの迷路の狭間に、体を曲げ、はまりこむようにして礼二郎はスヤスヤと寝息をたてていた。

それがまた、窓から差し込む夕陽に照らされて、童話の中のお姫様のように愛らしい。

ヨダレをたらしてさえないければ、天使の寝顔だ。

香織は、しゃがみこんで、ゆさゆさと礼二郎の体をゆすつた。なんだか、彼を起こすのは自分の役目のような気がしてきた。

「あー、香織だあ〜」

幸せそうな顔をして、礼二郎はムクリと起きあがった。

「朝、殴つてごめんね。おみやげ買って来た。クレープ。いつしよに食べよう?」

手近な段ボールをテーブルがわりにして、香織はクレープを置いた。ついでに、コンビニで買って来たおにぎりと、缶コーヒートをふたつ、並べる。

「はい。礼二郎には、カフェオレね」

なんとなく、こいつがブラックを飲むとは思えなくて、ミルクたっぷりのもを買ってしまった。

「うんうん」

コクコクとうなずいて、礼二郎は嬉しそうにカフェオレを飲んだ。

広い窓からぼかぼかと光が射し込んで、フローリングの床を照らしていた。

引つ越し段ボールに囲まれた、ささやかなディナーだった。

それから一週間もしないうちに、不思議なニュースが流れ始めた。

バナナが品薄だというのだ。バナナは輸入果物の代表だが、産地や流通過程に問題がないのに、店にバナナの姿がないなどという事態は、明らかに異常だった。

それと同時に、香織が二時間並んだクレープ屋が、街のそこそこに次々とオープンし始めた。それこそ、コンビニのように次々と生活圏の便利な場所に店ができていくのだ。しかも、開店した店、開店した店はいつも長蛇の列。周囲の飲食店に閑古鳥が鳴き始めた。

人々は、この異常な事態に気づくどころか、その異常さを助長するかのようにクレープ屋の列に並び、こぞつてクレープを求めた。

やがて、日々の食卓や、学食にまでクレープが並ぶよう

になつたが、毎日毎日、同じ物を食べているのに、誰も飽きたと言い出す者はいない。

「バナナが品薄ってさ、このクレープ屋さんが買い占めてるんじゃない？」

放課後、おやつバナナゼリー・クレープを食べながら、美咲が言った。

「バナナか……。そういえば、ツナバナナ、チャイナバナナ、バナナバーグ、クッキーバナナ……。メニューは全部バナナだねえ」

美咲と並んでクレープをぱくつきながら、香織は気楽に笑った。

バナナ、バナナ、バナナ……。

バナナって、さかさに読むと……？

香織は愕然とした。

このクレープチェーン店は、秘密結社ナナバと関係があるのだろうか？

今まで疑問に思わなかったのが不思議だった。ナナバのロボットに殺されかかった香織でさえ、疑問を感じないようなカラクリがあるのかもしれない。

香織は、ココロミエールを使って、クレープ屋の本店の前に立っていた。

このココロミエールは、人の心が読めるようになる目薬だ。だが、香織は色んな目薬をさしすぎて特異体質になつてしまったせいも、目薬をさしても相手に触らなければ心を読むことができない。正面から乗り込んで、スタッフの誰かれかまわず触りまくる作戦で、どこまで情報を得られるだろうか。

香織は、客を装って店の中に入っていった。店内は、独特のバナナクリーム匂いで充満していた。見回すと、驚いたことに、窓際のカウンターの席で、丸スツールに腰をひっかけた礼二郎が、幸せそうにクレープをほおばっている。

「礼二郎？」

一瞬、香織の胸に不安がよぎった。偶然というには、あまりにもタイミングが良すぎる。もし、彼がナナバの職員で、わざわざ引っ越しをしてまで香織を見張っているならば、香織がナナバの陰謀に気づいてここに来ることは予測済みかもしれない。

香織は、ココロミエールを使っているのを思いだした。

礼二郎にちよつと触れて、彼が考えていることを覗いてみればいいのだ。

香織は、礼二郎のほうに歩み寄った。もう、確かめるのが怖いなどと言っている状況ではなかった。

「香織？」

礼二郎は、驚いて目を丸く見開いた。

「香織、なんで、こんなとこまで来たの？ 家の近くにお店あるのに」

「あんたこそ、なんでよ？」

礼二郎は、うふ、と首をすくめた。

「んー、なんとなく」

香織は、礼二郎の隣のスツールに腰を下ろして、礼二郎の顔をのぞき込んだ。礼二郎は、小さい子供みたいに、口によこにクリームをつけている。

思わず香織は、礼二郎の口許のクリームに手を伸ばし、指先ですくった。

香織、かわいい……。

突然飛び込んだきた礼二郎の心の声に動揺して、思わず香織はクリームのついた指をパクツと口の中に入れる。

香織は、自分の行為に愕然とした。

これではまるで、恋人同士だ！

香織は焦って立ち上がると、今は気の迷い、と自分に言い聞かせて、本来の目的に立ち返ることにした。

香織は、意を決し、スタツフォンリーと書かれたドアを開け、中に入り込む。

そこで出会った人、出会った人を、残らず触りまくった。

あー、忙しい。休み欲しいな。

なに？ この子……。

店の関係者ではない香織の存在を確認してから触ると、相手の興味は香織に移行してしまい、本音は見えてこないようだ。

香織はコソコソと、厨房の偉そうな人の後ろに回り込んだ。

既に、アヤシイ女の子が紛れこんだことは、責任者に告げられているだろう。向こうのほうから背広を着た偉そうな人が血相を変えてやってくるのが見えた。

香織は、厨房の偉そうな人の後ろから、腰にちよつとタッチした。

マッタリンジン。マッタリンジン……。

コシヨウのような調味料の缶をわしづかみにすると、彼はクレープ生地の種類の中にそれをパッパパッパと振りかけた。

「マッタリンジン……？」

「どうやらそれは、アヤシゲな調味料の名前らしい。」

香織は、かけつけた背広を着た偉そうな男に腕を掴み上げられた。

「こんな小娘が産業スパイか？ マッタリンジンで従順に飼い慣らされているはずなのに……。」

香織は、奥の事務室にひきずられていく途中で、腕を掴んだ男の心の中から驚くべき情報を得た。

ナナバが開発したマッタリンジンは、人の味覚を狂わせ、その意志さえもコントロールする魔法の薬だ。街にナナバクレープだけが氾濫する状況を疑問にも思わないような、飼い慣らし現象を起すことができらしい。オサルニナルで人を猿化し、支配する計画が失敗したあと、今度はナナバクレープで人を支配しようというのだ。

香織はビルの七階の空き部屋に放り込まれ、ガチャリと鍵をかけられた。ためいきをついて部屋の中を見回すと、そこには先客が居た。情けない顔をして床に座り込んでいる礼二郎だった。

「あんた、なにやってんのよ？」

やはり、出てくる台詞はこれだ。

「中に入っていった香織、どうしてるのかな？ って思ってた、覗いてたら怒られちゃった」

「怒られたあ？」

香織が産業スパイと思われるのなら、その仲間と勘違いされたのかもしれない。

香織は、礼二郎の側に歩み寄った。床にちょこんと並んで腰を下ろす。

「あんたね、ここでどんな陰謀が繰り広げられてるか、わかってる？」

「陰謀？」

礼二郎は驚いた顔で香織を見た。

「そう。陰謀よ……。こないだ、21Bのクラスの子が全員入院しちゃった事件と同じ」

「なんで、そんなこと、香織が知ってるの？」

「うん……。」

答えを濁して、香織はそっと礼二郎にもたれかかり、その肩に頭をあずけた。

「かつ……香織……？」

焦って礼二郎は、体をこわばらせた。

香織……やわらかい……。香織、いい匂い……。香織、護ってやる……。

香織は、ガバツと立ち上がった。

近寄りたり離れたりの香織の不審な行動に、礼二郎は戸惑う。

「どうしたの？ 香織？」

香織、護ってやる……。

香織は、自分の行為に恥じ入っていた。そんなことを、本心から思っている礼二郎を疑って、無断で心を読んでしまった。このひ弱な寝てばかりいる礼二郎が、香織を護ろうとしていたなんて……。

じゃあ、隣に越してきたのもそのため？

人一人護るのは容易なことではない。実際、この礼二郎には無理だろう。でも、その気持ち香織には嬉しかった。

「ごめん。あたし、礼二郎のこと誤解してた」

「だいじょぶだよ。ぼく、香織が嫌がること……襲ったりとか、しないよ？」

なにを勘違いしたのか、礼二郎はトンチンカンなことを言う。

それが、香織の心を和ませた。

「うん。わかってる」

そのとき、だしぬけにドアが開いた。反射的に振り返ると、見覚えのあるロボットが立っていた。

「01郎……」

「あ、生徒会長だ」

香織と礼二郎が同時につぶやいた。

そこには、学校の屋上で爆発したはずのナナバのロボット01郎がいた。ロボットだから、かわりがいてもおかしくはないが、一度、壊れたものが復活しているというのは気持ちのいいものではなかった。

「ちゅちゅちゅ……」

01郎は、指を一本立てて舌を鳴らした。

「そんな低俗な名前で呼ばないでくれないか。ぼくは、01郎の体験と記憶をそのまま受け継ぎ、よりパワーアップされたナナバの誇るヒューマノイド・ロボット、続01郎だっ！」

説明が長かった。

「あ、そう」

ギャラリーの冷たい反応に気を悪くしたのか、続01郎は無言で香織を拘束し、部屋から連れ出した。

香織は、別室で椅子にしばらくつけられた。

薄ら笑いを浮かべる続01郎が、椅子の周りをゆっくりと歩きながら尋問する。

「なにが目的で、ここに潜入したんだい？ 国枝香織くん」

「べつに」

「君は、ココロミエールを持っているんだね？ あれを

使って、従業員の心を読もうとした。違うかな？」

「わかっているなら訊かないで」

「交換条件といこうじゃないか。君のことは見逃そう。そのかわり、ここで知ったことは黙っていてはくれないか？」

「えっ？」

「それだけ？ という顔をしているね。そうだよ。君は、もう既に、我々ナナバの協力者として考えられている。ココロミエールを自在に使いこなせる特別な体質の人間としてね。少々のオイタは大目に見ようじゃないか」

香織は、啞然とした。ナナバの秘密を知っても、特に狙われたりしなかったのはそういうカラクリだったのか。

「嫌よ」

続01郎は、余裕の笑みをうかべた。

「実際に君は、ココロミエールを使ってここに来た。そもそも、他人の心を読もうとするなんて、卑しい行為じゃないか。相手に気取られず、自分だけ得をしようというんだからね。つまり、君は、着々とこちら側の人間になりつつあるということさ」

「そんな……」

「ココロミエールの誘惑に勝てる人間などいやしな。君はすぐにナナバの幹部になれるよ」

香織は、ふるふると首を横に振った。でも、確かにそうかもしれない。ひ弱なくせに、せいっぱいがんばって香織を護ろうとしてくれている礼二郎を疑って、勝手に心を読んではまった。酷く嫌な思いをした。罪悪感にさいなまれた。ココロミエールを持っている限り、これからもそんな思いをするのだろうか。

と、そのとき。

ガツシャーンというガラスの割れる音とともに、窓からなにかが飛び込んできた。

窓際に居た続01郎が、吹き飛ばされて部屋の隅に転がった。



た。

「あ、礼二郎、助けなきゃ！」

慌てて部屋を飛び出し、七階の空き部屋に向かって非常階段を駆け上がった。

外で爆発が起こったので、ビルの中は騒然としている。香織の監視に時間を割いている余裕がなくなったのか、邪魔も入らずにさっきの部屋までたどり着いた。

ドアノブをひねる。鍵がかかっていない。

「礼二郎！」

室内に飛び込むと、そこに緑と赤のシマシマが見えた。

「うわ、今日はクリスマスカラー……」

礼二郎の靴下だった。「丁寧な、靴を脱いで、床に転がって眠っているようだ。」

この状況で、ぐーすか眠れる強靱な神経に半ば呆れながら、香織はゆさゆさと礼二郎の体をゆさぶった。

ココロミエールの効果が切れたらしく、眠っている礼二郎に触れても、彼の心の声は聞こえなかった。少し残念のような気もしたが、もとに戻ってホツとした気持ちのほつが大きかった。

それから数日。ナナバクレープの店は、閉店が相次ぎ、アツという間に消えてなくなった。そして、街の人々は、何事もなかったかのようにクレープづけの生活から普段の日常に戻っていった。

第三章 ほしくてほしくてたまらないゾ！

太陽系最後の秘宝、バナナダイヤモンド。というキャッチコピーで大々的に売り出されたその宝石は、あらゆるアクセサリーに加工され、宝石店の店頭に並んだ。お値段も、クリスマスプレゼントに重宝な程度から、目の玉が飛び出るほどのグレードのものまで様々だ。

「あ、そのピアス可愛い〜」

美咲の耳に揺れる小さなバナナ型に並んだラインストーンに顔を近づけて、香織は羨ましそうに言った。昨日、美咲は十七歳になった。彼氏が、バイトして溜めたお金でプレゼントしてくれたのだ。

「いいでしょ？ 銀座ジュエリー・バナナのオリジナルで、バナナダイヤモンドのよ」

嬉しそうに美咲は、廊下でぐるりと回ってみせた。

銀座ジュエリー・バナナ？

バナナンダイヤ？

なんだかあからさまにアヤシイネーミングのような気がして、香織は首をかしげた。

いや、それでも、彼氏からの誕生日のプレゼントは羨ましい。香織の誕生日ももうすぐだ。だけど、香織には、わざわざバイトしてプレゼントしてくれるような彼氏はいない。

「香織、礼二郎に催促しておいたら？」

礼二郎と言われて、香織はガックリと肩を落とした。礼二郎は、相変わらず毎日、寝て暮らしている。よくもまあ、あんなに何時間も寝ていられるものだと感じするくらいだ。あの、眠ることにしか興味のないような天然寝ボケ男は、きつと、一生かかっても女の子にプレゼントすることなど考えつかないだろう。そんなことを考えて、香織はハツとした。これではまるで、礼二郎からのプレゼントを期待しているみたいではないか。そんなことはない。絶対ない、と首をブンブンと振った。

香織が変だなと思ったのは、それから一週間ほどたったころのことだった。

美咲が、学校に来なくなった。

クラスでも欠席が目立つ。特に、オシャレに気を遣うような女の子から始まって、男子にも次第に欠席の輪は広がり始めた。

このところ、バナナンダイヤは大流行だ。

香織は、嫌な予感がした。またしてもナナバの陰謀なのではないかと思った。

そこで、放課後、香織は美咲の家に寄ってみることにした。

美咲は、自分の部屋で寝ていた。美咲のお母さんも心配していて、急に生活態度が変わった理由を聞き出して欲しいと頼まれた。

香織は、美咲の部屋に通されて目の玉が飛び出るくらい驚いた。ドレッサーに、キラキラ光るアクセサリーがぎっしりと並んでいたからだ。その、どれもこれもがバナナンダイヤの装飾品だった。これだけ集めるために必要な金額は莫大で、とても普通の女子高生が稼ぎ出せるものではない。

「美咲……これっ！」

焦って、香織はベッドで布団を被っている美咲を揺り起こした。

「うるさいな……。ほっといてよ」

「ほっといてって……、こんなのおかしいよ。美咲、美咲ったら！」

香織の心臓がドキドキと高鳴った。

「美咲、もしかして、万引きとか……援交とか……じゃないよね？」

「うるさいって言うてるじゃない！ もう、帰って！」

香織は愕然とした。

ほんの一週間前、彼氏からプレゼントされたバナナのピアスを、あんなに嬉しそうに見せてくれたではないか。それが、どうして、こんなことになってしまったのだろう。

ナナバ？

やはり、裏にはナナバが絡んでいるのだろうか。

「美咲……。こんなの、美咲らしくないよ。あたしが、もとの美咲に戻してあげるからね」

「うるさいったらっ！」

ばしっ！ 美咲の投げた目覚まし時計が、香織の腕に当たった。

「……ったー……」

香織は立ち上がって転がった目覚まし時計を拾い上げ、飛び出た電池を入れ直すと、二元の通り美咲の枕元に置いた。心の底から、フツフツと怒りがこみ上げてきた。人の心を弄び、自分たちの意のままに操ろうとするナナバのやり方に、腹が立って仕方がなかった。

オサルニナルを捜すために他人の心が見えるようになってパニックを起こした隣のクラスの生徒たちの中には、まだ入院している子もいる。ナナバクレープを三度のご飯の代わりに食べて、体調を崩したままの人たちもたくさんいる。

そして、今度は、バナナンダイヤ……。

香織は、ぐっと拳を握りしめた。

香織は、可愛いミニのワンピースに身を包んでいた。

「お願いだから、シャキツとしてね」

香織は、隣で所在なげに立ちつくしている礼二郎に言った。

礼二郎は、貸衣装のようなかっこいいスーツに身を包ん

でいる。いや、貸衣装のような、ではなく、本当に貸衣装なのだ。

「うーん……。なんか自信ないんだけどなあ」

ボソボソと言って、礼二郎は窮屈そうに身をよじった。

「いい？ あたしたちは恋人同士。そういう設定で、不自然じゃないようにがんばってね」

香織は指を立てて念押しする。

「香織と恋人同士……」

ポツと頬を染めて、礼二郎はうつむいた。

「そ、そんな反応しないでよ。あたしまでテレちゃうじゃない」

香織も、ドギマギと目をそらす。

「ごめん。がんばるよ」

二人は、恋人同士を装って宝石店に買い物に行き、バナナダイヤの秘密を探ろうとしているのだ。

バナナダイヤがアヤシイと睨んでから色々調べると、有り金全部をつぎ込んでバナナダイヤを求めような人が続出していることがわかった。それこそ、土地や家までも売り払い、多額の借金を重ねてもバナナダイヤを買い続けるという人も出てきているらしい。それがナナバの仕業だとすれば、きっと、バナナダイヤそのものに秘密があるはずだ。

そこで香織は、ナナバクレープの一件でいっしょに巻き込まれてしまった礼二郎に簡単ないきさつを話して、協力を頼んだのである。

その店は、豪華な外観のちょっと近寄りがたい雰囲気の高級宝飾店だった。

銀座ジュエリー・バナナ。この店のオリジナル商品バナナダイヤが、今、バカ売れしているのだ。

香織と礼二郎は互いに顔を見合わせると、入り口の玄関マットに足を乗せた。

うつかりすると、滑って転んでしまいそうな、一面にバナナの絵がちりばめられた特注マットだった。

「いらっしやいませ〜」

店内を暗い照明でセンスアップさせた高級宝飾店は、大混雑だった。ニューヨークのティファニーもびっくりとといった感じの混みようだ。

香織は事前にココロミエールを目にさし、相手の心が読める状態にしておいた。

「プレゼントですか？」

黒づくめの服を着た化粧の濃い店員が、礼二郎に向かって微笑んだ。

「もつじき彼女の誕生日なものですから……」

礼二郎は、少し照れたように、答えた。

香織はびっくりした。誕生日のことなど、礼二郎が知っているとは思わなかったからだ。それに、さっきとは打って変わって、見違えるように堂々としている。

「そうですか。誕生石がよろしいですか？　でも、今はバナナダイヤモンドがよく出てますね」

「あ、あの、バナナダイヤモンドのリングを見せて下さい」

香織は、ガラス張りのショーケースに歩み寄った。その中では、さまざまなデザインの指輪が素敵な値段の正札とセットで並んでいる。

「お客様は指が細いので、繊細なデザインのものもお似合いになると思いますよ」

にこやかに店員は言って、リボン型にデザインされた指輪の真ん中に、小さなバナナダイヤモンドが飾られたものを取り出した。

「うわ。可愛い」

思わず香織の本音が漏れる。

「こちら、プラチナですのでお値段も、お高くなっていますけど、シルバーでしたら、もっと石の数が増やせると思います……」

などと言いながら、店員は香織の手をとり、左手の薬指にリボンの指輪を滑り込ませた。

宝飾店のいいところは、アヤシイ痴漢行為をせずに相手に触れるということだ。

香織は意識を集中した。

「ティンレタイトのリピーターじゃないのね……。ほら、これであなかもバナナダイヤモンドの虜よ。」

「いかがでございますか？」

店員はにっこりと微笑む。

「可愛いと思うけど、ぼく、赤い宝石のほうが好きだな」

「ナイス、礼二郎！」

香織は内心、小躍りした。

「なによ、子供みたいな顔して。あんたに恋人なんか早いわよ。私でも彼がないのに……」。

別の方向に店員の気持ちは導いてしまったようだ。

「あの、じゃ、そっちのルビー見せてもらえますか？」

香織が言うと、店員は愛想良く応じた。ルビーの指輪を出して同じように香織の指に通す。

バナナンダイヤ買わないなら、さっさと帰ってよ。

もうじき工場から商品が届く時間なのに……。

香織は、ふう、とため息をついた。

「やっぱり、もう少し考えてからにするわ。いい?」

香織は傍らの礼二郎を見る。

「え? その赤いの可愛いけど……」

「それじゃあ、また」

香織は、店員にお辞儀すると、スタスタと出口に向かった。

「ありがとうございます」

店員の声と同時に、礼二郎が追いついてくる。

「えー、香織、買うんじゃないの?」

店の外に出た礼二郎は、存外、不満そうだ。

「あれ? ほんとに買ってくれるの?」

香織は、パチパチと目をしばたく。

「あ、あれ? 違うの?」

首をかしげる礼二郎を見て、香織はクスツと笑った。

「あたしの誕生日、来週の金曜日なんだ。知ってた?」

「えっ? ほんと?」

香織は、なあんだ、と笑った。

「知ってたわけじゃないんだ。でも、お芝居上手だったよ。

普段、寝てばかりいる礼二郎にしては、上出来」

礼二郎は、嬉しそうに頭をかいた。

「で、わかったのは……。バナナンダイヤにはテニイレタ

イトっていう変なものが使われているらしいってことと、

もうすぐ工場から納品に来るらしいってこと」

「じゃあ、その工場からの車を待つんだ?」

「うん。だから、礼二郎はここまででいいよ」

「え? ぼく、じゃま?」

「そうじゃないけど、危険だと思う」

「そんなこと言ったら、香織だって危険でしょう?」

香織は、必死の表情の礼二郎を見つめて微笑んだ。

「あのね、あたしは、ナナバの協力者ってことになってる

んだって。だから、いきなり殺されたりしないと思う。で

も、礼二郎は違うから……」

「でも……」

「だって、あたしのせいで礼二郎が殺されたりしたら、嫌

だもん」

「香織……」

礼二郎は、キュツと唇を噛んだ。

こうして向かい合って話していると、意外と礼二郎は背が高いことに香織は気づいた。見上げていると首が痛くなる。普段、机に突っ伏して寝ているので忘れていたのだ。

礼二郎も、普通の男の子なんだなあと、香織は思った。

礼二郎は、思い詰めた顔になって、香織を、ふわっと抱き寄せた。

えっ？　と思う間もなく、香織は礼二郎の腕の中にすっぽりとはまりこんでしまう。

香織……。

ココロミエールの効果で、礼二郎の考えていることがすっかり香織に見えてしまうはずだった。だけど、そのときの礼二郎はなにも考えていなかった。考えるといつより、香織を案じる気持ちでいっぱいだったのだ。心配で心配でたまらなくて、切なくて苦しくて、みたいな感情がぐるぐるして、はつきりとした思考の形をとってはいなかった。

香織は、そんな礼二郎の気持ちを、ぼんやりと感じた。人には、言葉にならない想いも、考えがまとまらないくらいに気持ちもあるのだと、礼二郎の腕の中で思った。

香織は、礼二郎の胸にトンと手をつけて体を離れた。礼二郎の顔を見上げてニコツと笑う。

「うん。ありがと。ぜったい無事に帰ってくるから。待ってて」

もう、礼二郎はなにも言わず、黙ってうなずいた。

配送のトラックに潜り込んで、香織はバナナダイヤモンドの加工工場にやって来た。ここで、テニイレタイトなるものをアクセサリーに加工しているのだろう。

香織は、こそこそと通風口のダクトに潜んで内部の様子を探索した。ダクトを這うと、せつかくオシヤレしてきたミニのワンピースが汚れて、哀しかった。

こんなとき映画なら、動力室を爆破し、工場を灰にして陰謀をうち砕くのだろうが、あいにく、香織にはどうやって爆破したらいいのかわからなかった。

重役室の上に走るダクトに潜んで、網の目になった換気口から下を覗いた。蜘蛛の巣が髪にひっかかって泣きそうだった。が我慢した。ちょうど、換気口の下で肥った親父と二人の若者が話していたので耳をそばだてた。

「では、より効果が増強されたテニイレタイトを麻生八カ

セが開発したのですな？」

肥った腹黒そうなおっさんが、嬉しそうに言った。麻生ハカセというのが、ナナバの秘密兵器を開発している科学者らしい。

「ボスは、さぞやお喜びでしょう」

腹黒そうなおっさんは、おべんちゃらを言ってまた、腹をゆすって笑った。

「ふん。あの猿……」

一人の若者が憎々しげに言い捨てた。

「シツ」メガネをかけた細身の男がそれを制する。「猿は猿でも人の心を操ることのできる猿ですからね。滅多なことを言うものではありませんよ」

ボスが猿う？ 香織は驚きのあまり、身をのけぞらせてしまった。

ゴイン。したたかに通風口の内部に頭を打ち付ける。

「誰だっ！」

誰何の声が響き、いつせいに皆が上を見上げた。その中に、ちらっと01郎の顔が見えたような気がした。まさか、続01郎に続いて、またしても、新しい01郎が開発されたのだろうか。そんな不安を抱きながら、香織は通風口を這って逃げ出した。

国道を、一台のバイクが疾走していた。ウルトラマンのようなヘルメットをかぶり、ゴーグルにマフラーのその姿は、行き交う車に乗っている人の注目を集める。

なにより目立っているのが、真っ赤なマントだ。併走する車の人たちは、なにかの撮影だと思って、思わずカメラを捜していた。

真っ赤なマントのライダーは、首から下げた携帯をときどきチェックしていた。

さっき抱きしめたとき、背中に仕掛けた発信器が、彼女の居所を告げている。

彼は、悪の秘密工場に単身乗り込んだ勇敢な少女を追っていた。

工場内に非常警報が鳴り響いていた。

香織は、生産ラインに潜り込み、防塵服で身をかためた作業員の間を縫うように逃げまどった。作業員たちは、香織が紛れ込んだことにも無関心で、ロボットのようになら

の仕事だけを忠実にこなしていた。

ラインの上を流れていくのは、小さな小さなICチップだった。おそらく、これがバナナダイヤに埋め込まれているのだろう。

なんとかして陰謀を阻止しなければ。でも、今の香織には逃げまどうことしかできない。

こんなとき、ロケット・ライダーがいてくれたら……、と思わずにはいられなかった。

香織は、やっとのことでトラックの搬出搬入口まで戻ってきた。ここに潜んで、次にシャッターが開くまで隠れていようか、と弱気になった。

「なあんだ、君か……」

背後から聞き覚えのある声がして、香織は全身が縮み上がった。おそろおそろ振り返ると、さっき見た、新しい01郎である。

「01郎……?」

「ちつつち」

続01郎のときと同じ反応だ。

「ぼくは新01郎。今までの01郎シリーズとは一線を画す最新型だ」

「はあ……」

香織は気のない返事をする。

「正面からコンタクトをとってくれば、工場の中なら僕が案内してあげたのに」

新01郎は、余裕しゃくしゃくでうそぶいた。

「じゃあ、今からでも、案内してくれる?」

勇気を振り絞って香織が言つと、新01郎はうなずいた。

「ああ。かまわないよ。で、君はどのセクションを見学したいんだい?」

「バナナダイヤに仕込まれたテニイレタイトをどうやってコントロールしてるのか知りたいわ」

「へえ」新01郎は、感心したように目を細めた。「やっばり、君は鋭いね。いいだろう。こっちへ来たまえ」

新01郎は、先に立って歩き始めた。香織は、妙な展開になってきたことに怯えながらも、千載一遇のチャンスとばかりに新01郎のあとについていった。

新01郎に案内されたのは、巨大なコンピュータ・ルームだった。大きな部屋一面に様々な機械が埋め込まれていた。

「凄い……。テニイレタイトを身につけた人間を意のまま

に操れるってわけ？」

香織は、周囲を見回した。ナナバの戦略は一貫している。人の心を操ったり、一定の方向に導いたり。まるで集団催眠にでもかかったように、人々はナナバの意のままに動かされてしまう。

「もともと、人間はね、同じ方向を見て走っていないと不安になる種族なんだよ。レミング現象、知ってるね？ レミングというネズミに似た種類の動物は、あるとき突然、海に向かって行進を始めるんだ。もともと群で行動するレミングは、止まることを忘れ、断崖の崖から次々と地獄の海面に向かってダイブしていくのさ。レミングが死の行進をする原因は、本当のところはわかっていない。数が増えすぎたとき自然淘汰の原理が働くのだという考え方もあるし、一匹の慌て者が、なにかに驚いて突っ走ったのを、みんなが釣られてついていっただけだという説もある」

「ナナバは、その驚かすきっかけをつくってるだけ、とでも言いたそうね」

新01郎は、満足したように微笑んだ。

「だってそうだろう？ 君たち女の子だって、毎年、決められた流行に乗せられて、同じファッションに身を包むじゃないか。この春の流行色はピンクだ、なんてマスコミが流し始める。すると、服飾メーカーも化粧品メーカーも用意していたピンクを店頭に並べる。皆がこぞってそれを買う。世界の流行はその業界によって操作されるのはあたりまえのことだ。そこにナナバが加わったところで目くじらをたてるほどのことじゃない」

新01郎の話は、なんだか説得力があった。確かに、ここ数年、なんでも流行ものにとびつく風潮が顕著になってきている。みんなと同じでなければいじめられる、そんな環境で育った子供が多いからだろうか。

クラリと眩暈がして、香織は側の椅子にもたれかかった。頭がぼんやりしている。

「まずい……。これは……。この新01郎の長いおしゃべりは……」

「騙されるな！ 香織っ！」

バン！ とコンピュータ・ルームのドアが開け放たれた。そこに、真っ赤なマントを翻したロケット・ライダーの姿があった。

「ロケット・ライダー、推参っ！」

例によって無駄に腕を振り回し、きっちりポーズを決め

て、ロケット・ライダーは部屋の中に躍り込んだ。

「新01郎！音波洗脳装置の性能が、だんだん上がってきたようだな？」

音波洗脳装置？香織はハタと気が付いた。そう言われてみれば、01郎はいつも言葉たくみに香織を丸め込もうとしてきた。

香織を背に庇い、ロケット・ライダーは新01郎を、ぐいと睨みつけた。

新01郎は、そんな二人をせせら笑った。

「野暮だねえ、相変わらずのレトロな格好で、君、それで街を歩くと変質者だよ？」

確かに01郎はパワーアップしているようだ。痛いところを突かれて、初めてロケット・ライダーはひるんだ。

「くそ。その口、封じてやる！」

ロケット・ライダーは、ポケットからガシャポンのカプセルのようなものを取り出し、ヒュッと新01郎めがけて投げつけた。

「稲妻スライムシュート！見ざる言わざる聞かざる！」

絶妙のコントロールで、カプセルは新01郎の顔面にヒットする。カプセルがパカッと割れて、中からアヤシイ緑色の物体がうにようにと流れ出てきた。

その、うにようには、まるで自分の意志を持っているかのように、新01郎の顔を覆い、耳や口の中に入り込んでいく。

「うっわー……」

あれはカンベンだわ……と思って香織は首をすくめた。

「もがむがへがふが……」

気障に悪態をついたと思われる新01郎だが、既になにを言っているのかわからない。

新01郎は、両腰に吊ったホルスターから未来的なデザインの銃を両手で抜いた。いかにもレーザー光線が出そうな銃だ。

「香織っ！」

ロケット・ライダーは、香織の腕を取ると、乱暴にドアの外に突き飛ばした。

その刹那、香織の頭に、ロケット・ライダーの心が流れ込んできた。それは、言葉ではなかった。でも、ついさっき、今と同じ気持ちを感じた。単身、ここに乗り込む少し前のことだ。

……礼二郎？

床にへたりこんだ香織は、目の前でコンピュータ・ルームのドアをボタンと締められて、急に不安になった。

この密室の中で、どんな闘いが繰り広げられるのだろうと思うと、心配で胸が張り裂けそうだった。ロケット・ライダーは、香織に危険が及ぶと判断して、彼女を部屋の外に放り出したのだ。

「ロケット・ライダー！」

香織は、その場から少し下がると、神に祈るような気持ちで結果を待った。

室内を、レーザー光線が縦横無尽に飛び交っていた。視覚を奪われた新01郎が、二丁の銃を乱射しているのだ。熱くなると後先考えない性質は、初代01郎から変わっていないらしい。

コンピュータ・ルームがめちやくちやだ。

ロケット・ライダーは、ナナバの最新ロボット新01郎をも凌ぐスピードでレーザーを避け、じりじりと新01郎との距離を縮めていった。

新01郎が乱射する銃のエネルギー・カートリッジがエンプティになった。すぐさま新01郎は銃を投げ捨てると、手当たり次第に側のものを殴り始めた。まるで、電脳が狂ったのではないかと思うほどの暴れようだ。何台も並んだモニターが次々と粉碎され、計器類が無惨な姿に変わり果てていった。

「あーあ、知らねえぞ。俺がやったんじゃねーからな」

暴れ回る新01郎の懐に飛び込んで、ロケット・ライダーは言った。そのゴーグルごしの瞳が不敵に笑う。

「残念だったな。パワーがあんのは、てめえだけじゃねんだよ！」

ぐわっ！ ロケット・ライダーの左手が、新01郎の心臓部にめり込んだ。

ズボツと左腕の拳が新01郎の背中まで貫通する。

脊椎にあたる部分の電送系を切断された新01郎は、体に開いた穴から蒼白い光をバチバチとスパークさせた。

どどどどどおん！ コンピュータ・ルームの中で、大爆発が起こった。

香織は肝をつぶしてその場に尻餅をついた。ロケット・ライダーのことが気になって、いてもたってもいられなかった。

「ロケット・ライダーっ！」

ガチャとドアが開いた。

香織は、ビクツと緊張する。

もうもつと視界をさえぎる黒煙とともに現れたのは、ロケット・ライダーだった。

「心配、かけたな」

へたりこんでいる香織を見下ろして、ライダーは優しく言った。

「実験室みたいな場所はないか？」

ロケット・ライダーに訊かれて、香織はすぐにピンときた。通風口から覗いたとき、そんな部屋が確かにあった。

「うん。こっち！」

香織はロケット・ライダーを案内して、品質検査試験室に向かった。

工場内にガンガン鳴り響いている警報のせいか、検査室には誰もいない。

ロケット・ライダーは、なにやら薬品をちよちよいと調合し、ビーカーだのフラスコだのを妙な形にセットしたのだが、香織には、その仕掛けの意味が分からない。

「三十分で爆発する。急げ！」

「ええっ？」

驚く香織をよそに、一方的にそう言って、ロケット・ライダーは香織をせかした。

廊下を走り、階段を飛び降り、また廊下を突っ走って、食堂の勝手口から外に出た。

周囲は、雑木林である。外に出て少し走ると、オフロード・バイクが隠れてあった。

「乗れ。しつかりつかまってるないと落ちるぞ」

ロケット・ライダーは無言を言わず、香織をタンデムシートに乗せると、キック一発でエンジンをかけ、ギヤを落としてクラッチミートした。

道なき道からトラックの通れる私道に出るまで、香織は舌を噛みそうな縦揺れに耐え、必死にロケット・ライダーの背にしがみついていた。

あ、香織の胸……。

いっしゅん、ロケット・ライダーがそんなことを考えたのがわかったが、とても後ろからどついたりできるような乗り心地ではなかった。

少し走ると、工場が巨大な爆発音とともに炎を吹き上げた。

ロケット・ライダーはバイクを止め、工場を振り返った。香織も、釣られて振り返った。

「香織、ちょっと動くなよ」

ロケット・ライダーに言われ、香織は体をよじつたままストップモーションした。その背中を少し摘まれる。

「どうしたの？」

「ん？ 虫がついてた」

ロケット・ライダーは、笑ってごまかすと、前に向き直ってバイクを発進させた。

実は、彼は、香織の背にさきほど貼り付た小さな発信器を取り外したのだが、当の香織は全く気がついていなかった。

ロケット・ライダーに家まで送って貰って、香織は急いでシャワーを浴びた。親に気づかれる前に身支度を整えないと、とんでもないお説教を喰らいそうだった。

夕飯のおかずを失敬して、香織は礼二郎のマンションに出かけた。彼に、かならず帰ってくるかと約束したからだ。心配しているだろうと思って焦ってやって来た香織だったが、礼二郎は、例によって鍵もかけず、カーテンも閉めずに部屋の中で爆睡している。あまりに気持ちよさそうに寝ているので、香織は、起きたら食べられるようにテーブルの上に食べ物を置き、メモを残して帰ろうとした。

そのとき、不意に、礼二郎の机の上にあるフォトフレームが目に入った。子供が二人で笑っている。くりくり坊主の男の子と、パンツが見えそうなミニスカートの女の子。その女の子には見覚えがあった。

「これ……、あたし……？」

愕然として、香織は眠っている礼二郎を見た。礼二郎は、幸せそうに微笑んで、むにゃむにゃと寝返りを打った。

#### 第四章 超能力バトルだゾ！

ずっとずっと小さいころ、ロケット・ライダーの話をしてくれた男の子がいた。

香織がいじめっこに泣かされたとき、カタキを討とうと立ち向かっていったその子も反対にボコボコにされて、二人で泣きながら帰ってきた。そのとき、少年は言ったのだ。

『あんないじめっこたちなんか、いつかきつと、ロケット・

ライダーがやつつけてくれるんだからさっ!」

ロケット・ライダーは、あの少年と香織の幻想のヒーローだったのだ。

香織は、隣の席で教科書を立て、すやすやと眠っている礼二郎を見た。相変わらず、幸せそうな顔だ。この礼二郎が、あのときの少年なのだろうか？ だったら、なぜ、その名乗らないのだろうか。香織が忘れていても思っているのだろうか。

そして、今は幻想でも子供の夢物語でもなく、実際に存在するロケット・ライダー……。

新01郎も言っていたが、確かに、あのスタイルは、今の時代のヒーローとしてはレトロでチープすぎるかもしれない。イマドキの子供には受けやしないだろう。でも、香織が子供のころ思い描いたロケット・ライダーは、まさにあんな感じだったのだ。香織にとって、ロケット・ライダーは、あの姿でなければならなかったのだ。それを知っているのは、あのときの少年に違いない。

あのときの少年が、ここで寝コケている礼二郎なのだとすれば、ロケット・ライダーも、この礼二郎なのだろうか……？ しかし、どうひいき目に見ても礼二郎の運動能力では、ロケット・ライダーになれそうもない。

三日後は体育祭。また、礼二郎は泣きたくなくなるくらいの無様な姿をさらすのだろうか。その姿に周囲が罵声を浴びせるのを見なければならぬのかと思うと、香織は憂鬱だった。

その日の昼休み、香織は、珍しく起きている礼二郎を見て驚いた。昼休みに起きているなど、奇跡のようなものだ。明日は雪でも降るのかもしれない。

「どうしたの？ 礼二郎。具合でも悪いの？」

思わず心配になって、香織は声をかけた。

「香織……。これ、なんだと思う？」

礼二郎は、それまでためつすがめつしていたティッシュペーパーの中に包まれた紙片を香織に示した。

ミシン目が入った小さな紙に、バナナの絵がいくつも並んで描いてある。

香織は、サッと青ざめた。

「ちよっと、礼二郎、これって……」

さすがに教室で口にするのはためらった。

「そっか……。やっぱり、アブナイ薬に見えるよねえ？」

のほほんと礼二郎は言った。

香織は、思わず声をひそめ、礼二郎におでこを近づける。

「どうしたの？　これ」

「机の中に入ってた」

「めっちゃめっちゃアヤシイよ。使ってみる気？」

礼二郎は、ふるふると首を横に振った。

「そりゃあそうだろう、と香織は思った。

「でも、バナナってのがちよつと気になるね」

「他の人の机にも入ってるのかなあ？」

礼二郎が緊張感のない声で言う。

香織は自分の机の中をのぞき込んで、礼二郎に向かって首を横に振った。

「ま、たとえ入ってたとしても、みんな、正体不明のものを試したりしないよ、きつと」

笑顔を作って、香織は言った。礼二郎も、コクコクとうなずいた。

ところが、香織の予想は大きく外れていたことが、翌日になってわかった。

いつもの通り登校した香織は、スピーカーから流れる生徒会長麻生礼一郎の声に立ちすくんだ。

「緊急生徒総会を開催します。全学年の生徒は、登校次第、体育館に集合してください。繰り返し……」

そんなこと、聞いてない。今日は、体育祭の総練習のはずだ。香織は嫌な予感にさいなまれた。このところ、香織の嫌な予感は当たるのだ。あわててコロロミエールを点眼し、体育館に急いだ。

体育館の入り口では、赤い腕章をつけた生徒たちが廊下を挟むように両脇に陣取り、そこを通る生徒たちをチェックしていた。週番でも役員でもない、どちらかといえば普段はめだたない生徒たちだ。

先生たちは、そこでシャットアウトされていた。

赤い腕章の生徒たちの視線を受けながら、そこを通り抜けようとした香織は、突然、目の前に出てきた一人の男子生徒に声をかけられた。よく見ると、左腕の赤い腕章には、バナナと十字架がデザインされた刺繍がほどこされていた。「国枝香織さんですね？　会長が呼びびです」

「え？　は、はあ……」

バナナの腕章に気を取られながら香織は曖昧にうなずい

た。

香織は、バナナの腕章の生徒に引きずられるようにス  
テージ脇へ連れて行かれた。

麻生礼一郎が香織を見て軽く手を挙げる。

「あの、もうお体のほうは良いんですか？」

礼一郎は、ノドの奥でクツと笑った。

「少しのオイタは大目に見ると言っただけだね、工場を爆  
破しても許して貰えるなんて、思っただいじゃないだろ  
うね？」

香織は、絶望的な気持ちになって、じりつと後ずさった。

「ホンモノの礼一郎先輩じゃないの？」

香織は、ナナバのロボットを睨み付ける。

ロボットは、涼しい顔をして言っただけだ。

「ホンモノさ。ぼくが正真正銘の真01郎だ」

「……真01郎？」

もしかしたら、麻生礼一郎なんていう人間は、最初から  
存在しないのかもしれない。香織は、背筋が冷たくなるの  
を感じながら、どうすることもできず、その場に立ちつく  
した。

赤い腕章をした生徒たちが、ずらりと体育館を囲むように  
並んだ。その一系乱れぬ統制は、いつか戦争映画で見たナ  
チスドイツの親衛隊のようだった。

生徒たちが、体育館に整列し終えると、真01郎は悠然  
と壇上に上がった。

「諸君！ 我々は、崇高な精神にとっとり、かくも自由で  
自主性のある生徒会を作り上げてきた。学校をはじめとす  
る社会権力、常識、カリキュラムの枠に捕らわれていては  
真の偉業は成し得ない！」

香織は、茫然と真01郎の演説を聞いていた。今までに  
も何度か、この詭弁を吐く口で香織自身も丸め込まれそう  
になってきた。言葉による洗脳こそが、01郎シリーズの  
特殊能力なのかもしれない。

演説は、延々と続いた。耳障りの良い声に、絶妙の間、  
小難しくも崇高な感じのする単語を選んだ語り口は、まさ  
に演説の天才だった。

「さあ、君たちも我々、バナナ十字騎士団の旗の下に集い、  
真の自由を勝ち取るための聖戦に身を捧げよう！」

真01郎が、拳を高く突き上げた。

赤い腕章をしている生徒たちはもちろん、並んで演説を  
聞いていた一般の生徒たちも、心酔したように拳を突き上

げた。

真01郎は満足したようにならずき、一同を見渡す。

「共闘を誓う者たちよ、諸君らに私は力を与えよう」

赤腕章たちが、生徒たちの間を縫うように渡り歩き、何かを手渡して回っていた。それは、香織の手にも渡された。

あの、バナナの絵のついたペーパー・アシッドだった。

「限られた人体能力を超え、超人たらんための薬マミロックだ。見えざるものが見え、聞こえざる音が聞こえ、空を駆け、森羅万象を司る。人類が未だ行き着くことのない高みをともし目指すのだ！ 聖なる杯を共に！」

真01郎が拳を振り上げる。

体育館が一体になって唱和した。

「聖なる杯を共に！」

「ジーク・ナナバ！」

「ジーク・ナナバ！」

「ジーク・ナナバ！」

生徒たちは、次々と渡されたペーパー・アシッドを口に含み始めた。

「うそ……」

かろうじて正気を保っていた香織は、あまりのことに震えながら壁にへばりついた。

礼二郎……。礼二郎はどこだろう？

もしかしたら、礼二郎もあの中にいるのだろうか……。

「手始めに、我々バナナ十字騎士団は体育祭の中止を学校および教育委員会に要求する！」

盛大な演説をのわりには要求がセコイような気もしたが、割れんばかりの歓声が轟く体育館の異様な熱気の中では、なにを言っても納得させられてしまうような気がする。

なすすべもなく壁にはりついていいる香織の耳に、国家権力の福音が聞こえてきた。

パトカーのサイレンだった。

それにしても、救急車だのパトカーだの、忙しい学校だ。

きつと、ワイドショーの中継車なんかも押し寄せることだろう。香織は、天の助けとばかりにそのサイレンに耳を傾けた。

「諸君、バナナ十字騎士団の力を見せるときがやってきた。

闘え！ 超能力戦士たちよ！」

「ええっ？」

香織は思わず声を上げた。あまりに大声だったので、自分の手で自分の口をあわてて塞ぐ。

超能力というと、あの超能力だろうか……。

マミロック……。確かに、マミとかロックとかいう名のエスパーが出てくる漫画があったような気がするが……。体育館には三つの出入り口がある。ステージの反対側に一階廊下への入り口があり、ステージに向かって右側がグラウンド、左側は中庭だ。

グラウンドに放列を作った警官隊は、拡声器を使って呼びかけを始めた。例によって、おかさんが心配しているとか、受験の苦しみはよくわかるとか、まるで見当違いのことをわめきたてている。

真01郎は、顎をしゃくって赤腕章たちに命じると、体育館の三力所の出入り口を全て開放した。

警官隊が色めき立つ。

特に訓練をしたわけでもないのに、生徒たちは赤腕章に続いて外に躍り出た。怒濤のような関の声を上げ、警官隊に挑みかかる。

香織は、啞然としてその様子を見守った。

生徒たちのパワーに圧倒されて、その場から動くこともできなかった。

女子生徒の一人が、屈強な警官を放り投げた。手の先から怪光線を出している生徒もいる。私服刑事の服に離れたところから火をつけて高笑いしているのは、いつもさえないオタク少年だった。

超能力戦士。本当にあのマミロックを服用しただけで、普通の人間が超能力者になってしまふのだろうか。しかも、真01郎の命令を従順に聞くロボットのような超能力者に。

「マミロック……」

香織の右肩に真01郎の手が乗っていた。相変わらず、心は読めない。

「不思議な光景だろう？ 普段、運動の苦手な生徒ほど高度な超能力者となる。マミロックの力を最大限に引き出すのは劣等感なのだ。どうだい？ 我がナナバの圧倒的な支配力は……」

「気持ちのいいもんじゃないわね」

冷たく言い放って、香織は肩に乗った真01郎の手を払った。

「ふうん。震えるくらい怯えてるのに、批判できるとは大したものだ」

劣等感が超能力の原動力。あくまでも人の心に秘めたものをえぐり出そうというのか。

真01郎の言うとおり、さつきから香織は震えが止まらなかった。言葉一つで人間を操り、意志を持たない下僕に変えてしまえるロボットの存在が怖かった。そして、そんなものを平気で作り出してしまえる秘密結社ナナバが怖かった。こんな組織と真っ向から戦って、ロケット・ライダーは勝てるのだろうか。

そんなことを考えて、香織は一番大事なことに気がついた。

ロケット・ライダーは、いったい、なんのためにナナバと戦っているのだろう。

そして、いつも彼に護られてばかりの自分は……。香織は、自己嫌悪に陥った。ナナバの開発したココロミエールが使いこなせるというだけで、ほかにはなんの取り柄もない、戦う力もない自分を呪った。

今ここで、隣に立っているナナバのロボットを破壊することができたなら、この騒ぎも収まるかもしれないのに。

そのとき、大乱戦の校庭で、動きがあった。

皆が、校舎の上を指さしている。その指の先がよく見えなかったので、香織は上履きのままグラウンドに降りた。こんな大事件のさなかに、上履きがどうのと気になってしまっ自分の小胆さを嗤った。

香織は、校舎の上を仰ぎ見た。

キラリと眩しい太陽が鋭く目を射る。

虹色の光のオーラを浴びたヒーローがそこに立っていた。赤いマントに白いマフラー。ロケット・ライダーだ。

ロケット・ライダーは、「とうっ！」という感じで四階の校舎の上から飛んだ。

香織は驚いて息を呑む。

ロケット・ライダーは、空中でぐるんと回転して二階部分の張り出したルーフの上に着地した。ふわっと舞うように腕を動かし、キメポーズをとる。

「ロケット・ライダー、推参！」

登場のポーズがこなれてきている。いつもよりかっこいいと香織は思った。

どうやら超能力戦士たちは、自分たちの支配者の仇敵を本能的に感じ取ったようだ。

一方の警官隊は、この珍奇な闖入者に驚き呆れ、茫然と成り行きを見守っている。

超能力戦士たちは、一様に二階のルーフに狙いを定めた。電撃を放てる者は雷を呼び、念力を操れる者は念を集中し

た。

一瞬の後、数多の力が集まった二階のルーフは、粉々になつて崩れ落ちる。

「ロケット・ライダーっ！」

香織が叫んで駆け出した。遠巻きに観戦している場合ではなかった。

香織の心配をよそに、ロケット・ライダーはふわりと校庭に着地する。

ロケット・ライダーに向かって、雲霞のごとき数の超能力者たちが殺到した。

香織は、必死だった。なんとかして、自分もライダーの力になりたいと思っていた。無我夢中でグラウンドを疾駆し、事態の急展開に戸惑つ警官から拡声器をひったくった。

「みんなあつ！ かつこいっ！」

黄色い声を出して、香織は拡声器で叫んだ。

「超能力者になるなんて、ステキ！ あなたたちは、なんでもできるわ！ 欲しいものも思いのまま。世界征服も夢じゃない！ なんて羨ましいのっ！」

香織は、思いつく限りの美辞麗句を費やして、グラウンドに群れる超能力者たちを誉めちぎった。

やがて、一部の生徒たちがヘナヘナと地面に倒れ始めた。超能力の原動力は劣等感だと真01郎は言った。それが本当なら、彼らが自信を付ければ力を出せなくなるはずだ。案の定、最初に真01郎によって選ばれた赤腕章たちが動けなくなつていった。彼らは、生徒の中でも特に運動の苦手な、普段、みんなにバカにされている子たちであった。

じきに、生徒たちの約半数が、戦意を喪失した。これが本当の誉め殺しだ。

「今よ！ すぐに拘束して！」

香織は、警官に向かって叫ぶ。偉そうな私服の刑事が、慌てて周囲に指示を出した。

「お巡りさん、なんでもいいから誉め続けて！」

香織は、拡声器を奪い取つた警官に拡声器を戻し、再び体育館に向かってダッシュした。

「ん、あんたはエライ！」

拡声器を手にした警官が叫ぶ。センスに問題があるかもしれないが、超能力戦士たちの戦意を奪つことはできるだろう。

「ロケット・ライダー！ みんなを操っているのは真01郎よっ！」

香織は声を限りに叫んだ。

香織の声を聞き、ロケット・ライダーはシュタツと二本の指で敬礼した。それを香織に向かってヒュツと投げる。

ロケット・ライダーは腰からぶら下げていた新兵器を取り出した。ステンレス製の水筒だった。

ロケット・ライダーは、それを肩にかつくと、大きな声で叫んだ。

「超アレルギー・アトミック・ボム、杉花粉胡椒ファイヤーっ！」

ネーミングセンスは相変わらずだったが、その内容を聞いて香織は、あわてて体育館の中に逃げ込んだ。

ボンッ！ ロケット・ライダーが肩にかついだ水筒の底が抜けて、後ろと前にオレンジ色の矢火が吹き出した。

水筒から撃ち出された超アレルギー・アトミック・ボム、杉花粉胡椒ファイヤーは、数十メートル上空まで撃ち上がると、大きな音と共に炸裂した。

ぶわっつと、もの凄い圧力とともにグラウンドに向かって大量の粉が降り注ぎ、周囲に広がっていく。地面に激突して上空に跳ね返った大量の刺激性の粉が、もくもくとキノコ雲のように天空に吹き上がった。

その一撃で、残っていた数百人の生徒たちのうち、杉花粉アレルギーの者は再起不能に陥った。残りの者も胡椒の強烈な破壊力の前にヨレヨレである。

香織は、体育用具倉庫の、おせじにも綺麗とは言い難い白い木綿のカーテンを引きちぎり、中庭の水飲み場まで走った。カーテンを水で濡らすと鼻と口を覆う。現代の日本では、催涙ガスよりも制圧力の高い爆弾だった。巻き込まれないためには、自衛するしかない。

しかし、この爆弾も、生身の人間にしか効果はないのだ。香織が体育館に戻ると、グラウンドで悶絶している者たちを尻目に、ロケット・ライダーと真01郎が対峙していた。香織はハッと息を呑み、中庭から体育館に登るステップで立ち止まった。体育館から外に視線を走らせると、グラウンドはまだ、爆煙に霞んでいる。

真01郎は、ニヤツと笑うと、ロケット・ライダーに向かって高圧的に言った。

「今までの01郎と同じだと思ふなよ。私は、最高にして最強の真01郎だ！」

「確かに、新01郎は傑作だったよな。コンピュータ・ゲームの中でレーザー乱射するなんざ、オオボケもいいところ

だ」

「きさま！ 言わせておけばぬけぬけと！」

ロケット・ライダーは笑った。

「今までのオオボケ01郎とは違うんだろ？ あんたが怒ることねえじゃん」

「うぬう」

真01郎は悔しそうに唇を歪めると、右手をブンと振った。

「シャキーン！ 右手が鋭い剣になる。

「あつ、きつたねえ」

真01郎は、思わず半身を引いたロケット・ライダーに、容赦なく斬りかかった。

ふわっと後ろに跳んで刃をかわしたロケット・ライダーの靴先がスパツと切断される。ジェット付きバツシュのつま先が、飛んだ。

香織は思わず息を呑む。

「おー、危ねえ」

切断されたロケット・ライダーの靴の先から、靴下が覗いた。

派手なオレンジ色だ。

香織は、どこかの誰かが好んではいているような靴下のセンスに、目を見張った。

「ははははは！ どうしたロケット・ライダー！ 逃げ回るだけでは勝てないぞ！」

勝ち誇ったように真01郎は高笑いする。

ロケット・ライダーは、たくみに剣をかわしながら体育用具倉庫に走りこんだ。用具子倉庫を見回し、バレーボールのネットなどを張るバレーポストをぐつと握った。カーボンファイバー製で丈夫な武器だ。

「逃げ場はないぞ！ ロケット・ライダー！」

用具倉庫の入り口に立ちふさがり、真01郎は右手の剣をちらつかせた。

「っせい！」

ロケット・ライダーはバレーポストを抱え、丸太で門のかかった扉を突くように、まっすぐ真01郎の腹に獲物を叩き込んだ。

どつん！ 衝撃で、真01郎はふつとんで、体育館の床に尻餅をつく。

ロケット・ライダーは、バレーポストを左肩にかついで、用具倉庫から出てきた。真01郎を見下ろして、ボソツと

言う。

「おまえ、なんのために戦ってんだ？」

床から半身を起こし、真01郎は呻く。

「きさま……なにを……」

「本当に、こんなことのために創られたのかよ？ おまえを創ったヤツは、こんなことを望んでるのか？」

「私は、ナナバの最高の頭脳を結集して創られた最高級戦略ロボットだ。それ以外のなにものでもない」

「麻生礼太郎も堕ちたもんだな……。いよいよボケやがって、自分の創ったものがどう使われるかも考えやしねえ！」

「麻生礼太郎だと？」

ブン！ ロケット・ライダーは、バレーポストを真01郎に向かって振り下ろした。

ずしゃ。間一髪で真01郎は転がって逃げる。体育館の床に穴が開いた。

真01郎は、素早く体勢を立て直し、床にめりこんだバレーポストを引き抜いているロケット・ライダーに向かって斬りかかった。

反射的にロケット・ライダーは、真01郎の剣をバレーポストで受ける。続、新、真とパワーアップしているだけあって、真01郎はもの凄いパワーだった。

「くっ！」

ロケット・ライダーは、真01郎の剣を跳ね返そうと渾身の力を込めた。

その瞬間。

バッキーン！ バレーポストが、まっふたつに折れた。

軽量で強いカーボンファイバーでも、限界を超えた衝撃が加わるとバキッと折れてしまう。

「きやあっ！」

真01郎の鋭い剣がロケット・ライダーの顔面に迫って、香織は悲鳴を上げた。

ガシッ！ ロケット・ライダーは、自分の左腕を額にかざし、バレーポストでしていたように剣を受け止めた。

みるみる腕に血がにじんで、ポタポタと体育館の床を朱に染める。

「う……そ……。うけとめた……？」

香織は愕然とした。バレーポストを折ってしまうほどの破壊力のある剣を、生身の人間がどうやって受け止めるというのだ？ 普通は、腕がまっふたつになって落ちるだろう。

「ふははははは……。そうだったな……。きさまは……麻生礼太郎の……」

ロケット・ライダーは、真01郎の台詞を最後まで聞かなかった。剣を受けた左腕を強引に外側に払うと、トンと床を蹴ってバツク宙を切った。わずかに体勢を崩した真01郎の後頭部に、回転する際の反動をこめて蹴りをブチ込む。

バキ、と真01郎の首が鳴って、首から金属部品が飛び出した。

ブラブラになった首がスパークする。

真01郎は膝から床に崩れ落ち、体全体がオレンジ色の光に包まれたかと思うと、アツという間に爆発した。

香織は、中庭の大きな木の陰に走って身を伏せ、周囲を吹き抜けていく爆風に耐えた。

グラウンドで半死半生になっていた生徒たちも真01郎が破壊されたことよって正気を取り戻す。胡椒と杉花粉でぐしゃぐしゃになりながら、警官隊といっしょにグラウンドにへたりこんでいた。

爆風がおさまると、香織は体育館の惨憺たる様子をのぞき見た。床に大穴があいている。

ロケット・ライダーの姿はどこにもない。

香織はキュツと唇を噛むと、散乱した瓦礫を飛び越えて三階の自分の教室を目指した。

階段を二段ぬかしで駆け上がり、息も突かずに疾駆して、教室に飛び込む。

そこに、机に突っ伏して、太平楽に寝コケている礼二郎の姿があった。

その、見慣れた日常的な風景に、香織はホツとして、彼を起こさないように机の側に歩み寄った。礼二郎は、窓から差し込む陽光を受け、幸せそうに眠っている。

礼二郎がロケット・ライダーではないかと疑っている香織だったが、この礼二郎が、ついさっきまで、あんな壮絶な闘いを繰り広げていたなどとは思いたくなかった。真01郎の剣を受けたロケット・ライダーの左腕は、多分、生身の人間のものではないのだろう。

そっと、寝ている礼二郎の左腕に触れてみた。制服の袖をめくってみたら、なにかわかるだろうか……。でも、香織にはそれをする勇氣はなかった。

突然、腰の力が抜けて、ストンと床にへたりこんだ。ずっと緊張しつづけていたのだ。無理もない。礼二郎の机につ

かまって、コツンと机に頭をくつつけた。

ふと、礼二郎の足首が目に入った。ズボンと上靴の間から細い足首が覗いている。今日の靴下は、青とオレンジのシマシマ模様だった。

青とオレンジ……。

確か、真01郎に切り裂かれたバツシユの先から覗いた靴下は、このオレンジ色ではなかったか……。

香織は目を閉じた。床にすわりこみ、机におでこをくつつけたまま、ポロポロと涙をこぼした。

帰宅した香織は、母親をつかまえて、幼いころのことを聞き出した。

麻生礼二郎という男の子が近所にいなかったかということ、そして、その子はどうしていなくなつたのかということ。母は、最初は、知らないと言っていたが、あまりに香織が真剣なので、ついにその重い口を開いた。

「礼二郎くんのお父さんは有名なロボット工学の博士で、ちよつと風変わりな人だったわ」

「もしかして、麻生礼太郎っていう名前じゃない？」

母は、驚いた顔をして香織を見る。

「そうよ。その、お父様のね、お仕事の都合で引越していったのよ」

「それだけ？ それだけだったら、あたしに黙ってる必要なんかないよね？」

母は、観念したように言った。

「香織が、シヨックを受けるから、黙っていようと思っていただけ……」

「いいから教えて。本当のことを知らないと、あたし、一生後悔する」

「礼二郎くんね……、幼稚園のとき、あなたの命を助けてくれたのよ」

そう言つて、母は、慈愛に満ちた笑顔を見せた。

「え……？」

「居眠り運転のトラックが、公園に突っ込んできたの。まだ五歳だったのに、礼二郎くんは、香織をかばつてトラックの下敷きになつたわ」

「うそ……」

五歳……。そんな小さなころから、礼二郎は香織を護つてきたというのか……。

「礼二郎くんは、生死の境をさまよって、命だけはとりとめただけど……」

「どうしたの？」

「両足と、左手を失ったわ」

「両足と、左手？ 香織は、あまりのショックで一瞬、気を失ったような気がした。」

「それで……礼二郎は？」

「かすれた声で香織は訊いた。」

「お隣のマンションが建つ前は、あそこが麻生さんのお宅だったんだけど、お家を売って、引っ越して行かれたわ」

「礼二郎……」

つぶやいて、香織はふらりと立ち上がった。

「香織、大丈夫なの？」

香織は、うつろな視線で母を見る。

「話してくれてありがとう。それで、少しわかったような気がする……。あたしは、大丈夫。ちょっと外に出てくるね」

香織は家を出ると、一目散に隣のマンションに走った。

礼二郎の部屋まで突っ走る。

今日もやっぱり、部屋に鍵はかかっていなかった。いつものことなので、かまわずドアを開け放つ。

でも今日は、なんだか様子が変わった。

電気をつけた。

「うそっ！」

香織は、靴を脱ぐのももどかしく、あわてて室内に上がり込んだ。

いつもは、床に転がって寝コケているはずの礼二郎の姿がないばかりか、荷物が消えているのだ。机も、ドレッサーも、食器も、雑然と散らかっていた雑誌さえ、きれいさっぱりなくなっている。

「礼二郎！」

叫んだ。もちろん、返事はない。

「そんな……」

香織は、泣きながら部屋中を捜し回った。捜すといっても、狭いワンルームだ。ユニットバスとクローゼットを覗けばもう、開けるドアはない。香織は、ふらりと対面キッチンのカウンターに歩み寄った。

そこに、ただひとつ残されたものがあつた。

この部屋に、確かに礼二郎がいたという証明だった。

香織は、カウンターに置かれていたフォトフレームを手

に取った。くりくり坊主の男の子とミニスカートの女の子がニコニコ笑って映っている。

「礼二郎……っ！」

フォトフレームを抱きしめて床に泣き崩れた。

香織は、心の中で礼二郎の名を叫び続けた。

## 第五章 ヒロイン絶対絶命だゾ！

香織は、所在なげに隣の空席を見つめていた。真01郎の一件から一週間。休校になっていた学校がようやく再開されて、香織は礼二郎に会いたい一心で登校してきた。突然、姿を消した礼二郎を捜そうにも、手がかりがまるでなかったからだ。それなのに、滅多なことでは学校を休んだことのない礼二郎が、姿を見せなかった。

礼二郎に会いたい……。

香織は、授業も上の空だった。

そんな昼休み、ぼんやり学食でうどんをすすっている香織の耳に、とんでもないニュースが飛び込んできた。ロケット・ライダーと名乗る赤マントの謎の人物が、幼稚園を乗っ取って、子供を人質に立てこもっているというのだ。

香織は、うどんもそこそこに、職員室に駆け込んだ。担任をつかまえて、礼二郎のことを訊きまくる。

「それがなあ。あいつは家庭環境が複雑で、保護者の叔母さんってのが、その……、本当の叔母さんじゃないらしくてなあ……。」

担任は、ごにょごにょと煮え切らない。

「本当じゃなかったらなんなんですか？」

香織はイライラした。

「しょうがないな……。自分の目で確かめてこい。これも経験だ。」

担任は、わけのわからないことを言い、礼二郎の連絡先を書いたメモをくれた。

香織は午後の授業をサボって学校を飛び出し、電車を乗り継いで、閑静な住宅街までやってきた。担任の書いてくれたメモを頼りに、礼二郎の家を捜し歩く。道が入り組んでいてよくわからないので、井戸端会議をしていた二人の主婦に、メモを示して訊いてみた。

「あら、このお宅って……ねえ？」

肥った主婦が、もう一人に目配せする。

「ご主人が失踪なさって、アレがアレでしょう?」

もう一人も、妙な言い回しをする。

「あの、アレがアレって……?」

香織はつつこんでみた。

主婦二人は、顔を見合わせて笑い合う。

「このお宅のご主人、何年か前に失踪したんですけどね、そのとき愛人だった若い娘さんと、今は、ご主人の息子さんが……ねえ?」

もってまわった言い方が得意な肥った主婦は「おほほ」ととってつけたように笑った。

「で、お家はどこなんですか?」

事務的に香織は訊いた。こういう手合いには深入りしないのが利口だ。

「突き当たりの丁字路を右に曲がって……」

だいたい場所を聞いて、香織は礼を言い先を急いだ。

香織が主婦たちと少し離れると、後ろから爆発するように笑う声が聞こえてきた。不愉快だった。

それでも、香織は、言われたとおりの道を進み、巨大な門構えの豪邸にたどりついた。

庭が綺麗に手入れされた、木の香りがしそうな和風の家だ。表札を確認すると、たしかに麻生とある。香織は、正直、圧倒された。あの礼二郎が、こんな大きな家に住んでいるとは想像もしていなかったからだ。よく考えれば、かつての麻生邸の跡地にマンションが建っているのだから、香織の家の隣にあったという昔の家も、豪邸だったに違いない。

香織は大きく深呼吸して、門をくぐり、屋敷のインターフォンを押した。

「はい」

若い女の人の声がして、パタパタと廊下を走る音が聞こえてくる。カラリ、と引き戸を開けて現れたのは、上品な和服に身を包んだ、やわらかな物腰の美女だった。

「あ、あの……」

香織は、その女性の持つ雰囲気呑まれてしまって、まともに言葉が出てこなかった。

和服の女性は、ふわっと微笑んだ。

「あ、れいくんのお友達でしょう?」

れいくん?

礼二郎のことを言っているのだと、香織は少し遅れて理解した。

「れいくん、具合が悪いみたいなの。今、寝てますけど、よかつたら上がってくださいな」

今に限らず、礼二郎はいつでも寝ているじゃないか、と内心、香織は思った。

「じゃあ、お言葉に甘えて……。お邪魔します」

香織はできるだけ礼儀正しくお辞儀をして、ぴかぴかに磨かれた檜の廊下を、美女に案内されるままに進んだ。

家の中は、とても手入れが行き届いていて、ピンと空気が澄んでいた。

前に行く美女は、つと立ち止まると床に膝を折り、すつと和室の戸を滑らせた。

「どうぞ」

香織は、勧められるままに部屋に足を踏み入れる。

「今、お茶をお持ちしますね」

にっこり笑って、美女はもとのように戸を閉め、去っていった。きちんと座って引き戸を操るとき指の動きというのは美しいものだ、と香織は思った。

香織は、ほろつと息をついた。十六畳はあるつかという広さの部屋のなかほどに、布団が一組敷いてある。見慣れたサラサラの茶色い髪が、けだるく寝返りを打った。

「礼二郎？」

香織は、そつと歩み寄った。

おでこに熱冷ましのジェルシートをはりつけて、礼二郎は子供のように赤いほっぺをして眠っている。その枕元に静かに座って、香織は礼二郎の顔を見つめた。なんだか苦しそうなので、今日は起こすのをやめた。

「礼二郎……。母さんに、子供のころの話、聞いたよ。ごめんね、あたし、ぜんぜん覚えてなかった。ロケット・ライダーのことは、とってもよく覚えてただけだね……。助けてくれてありがとう」

礼二郎の左手が、布団から飛び出していた。パジャマの袖がめくれている、ペタペタと熱冷ましジェルが貼り付いているのが見えた。

腕に何枚もジェルシートを貼っている不自然さに首をかき上げて、そつとその左手をとった。腕が熱かった。

ジェルシートとシートの間、手首と肘のまんなかあたりに大きな傷跡が残っていた。

真01郎の剣を受けたときの傷だった。

大粒の涙がこぼれ落ちて、礼二郎の手の甲で弾けた。

香織は、そつと礼二郎の左手にキスをした。

礼二郎は、身をよじった。

「穂菜華（ほなか）……？」

半覚醒状態で、誰かの名を呼ぶ。さっきの女の人の名前だろっか。

「穂菜華……」

もう一度ささやいて、礼二郎はふわりと香織の頭を抱き込んだ。礼二郎の体が熱かった。

えっ？　と思つて身を任せると、寝ボケた礼二郎は、香織の額にキスをした。

香織は驚いて礼二郎の腕からすり抜けた。穂菜華とささやいてキスするということは、そういう関係だということだ。

「そんなのないよ……」

香織は、キュツと唇を噛むと、部屋を飛び出してパタパタと廊下を駆けた。

「あ、あの、れいくん、起きました？」

香織の気配を察して、台所から和服の美女が出てくる。

香織は、まじまじとその女性を見つめた。美しかった。相手を慈しむような優しさを感じた。決して嫌味でない透明な色香を漂わせていた。この人ならば、あの、アンバランスな二面性を持つ礼二郎を、優しく包み込んであげられるのだろう。

「穂菜華さ……ん？」

香織は確認してみた。

「はい？」

穂菜華は小首をかしげる。

「あたし、帰ります。あの、お願いなんですけど、礼二郎に新聞とかテレビとか見せないでくださいますか？　でないと、あんな体なのに、きつと飛び出していつっちゃうから」穂菜華は静かに微笑んで、浅くうなずいた。心得ているという笑顔だった。

香織も少しだけ微笑むと、麻生邸を辞した。

礼二郎は目を覚ました。部屋の中の空気がいつもと違うような気がして、首をかしげた。この家の中では、いつもはしない香りがする。フローラルブーケのシャンプーの香りだ。

「香織？」

首をひねりながら、礼二郎は、熱でふらつく体でむりやり布団から起き出した。障子の側の文机に置かれたノート

パソコンを立ち上げる。

一週間前の事件直後に来たメールが厄介なシロモノだった。

無気力化電子メール、キガメール。

そいつは、電子部品の情報伝達を阻害する電子のゴミを放出し続けていた。これは、ロケット・ライダーの正体を特定したナナバの個人攻撃だと思われた。ヤッらは、ロケット・ライダーがどんな構造の体を持っているか知っているのだ。なにしろ、ナナバには、礼二郎の手足を造りサイボーグとして復活させた張本人、麻生礼太郎が居る。

「まったく、遊んでんじやねえんだぞ、親父……」

パソコンに向かって毒づく。キガメールの影響で、体の機械部分から発生する熱がうまく冷却できなかった。いつもは、すぐに自己治癒する腕の傷も、一週間たつても治らない。このままでは、普通に動くことも難しいだろう。礼二郎は、朦朧としながらも、キガメールの解析に没頭した。

香織は、ロケット・ライダーが子供を人質に立てこもっているという幼稚園に来ていた。周囲には、警官隊やマスコミ、野次馬が鈴なりに集まっている。

「要求が出ました！ 犯人は、特定の人物との会見を求めています！」

リポーターが、カメラの前で焦って事件の動きを伝えている。

「それは、どんな人物ですか？」

スタジオからの質問。

「それは、公表されておりません」

そりゃあそうだろう、と香織は思った。でも、ロケット・ライダーを名乗り、こんなに目立つ事件を起こすとすれば、狙いはひとつだ。香織は、犯人の恋人だと申し出て、現場の指揮をとっている警部のところまでたどり着いた。

例によって拡声器を渡され、犯人に呼びかけてくれと細かな注意を受ける。だが、マイクさえ握ってしまえばこっちのものだ。香織は大きく息を吸い込むと、幼稚園の中に立てこもるニセライダーに向かって話しかけた。

「ニセライダー、聞こえる？ 香織よ。待っても無駄。本物のロケット・ライダーは来ないわ。あたしと会ってちょうだい」

警部が、驚いて香織のマイクを取り上げた。

「困りますよ、ちゃんと指示通りに話してくれないと……」

「いいの。今のが彼にはいちばん効果のある情報よ」

警察車両の中に準備されている電話が鳴り響いた。交渉役の刑事が電話をとる。

交渉役は、驚いたように、香織を見た。

「警部。その子を一人で中に入れると言ってます。かわりに人質を全て解放するそうです」

「な……んだと？」

警部は苦虫を噛みつぶしたような顔になった。

香織は、幼稚園のプレイルームに入ってしまった。民間人の、未成年の女の子を人質交換に使うなど、前代未聞だ。事のなりゆきしだいでは、何人も警察のお偉方の首が飛ぶことだろう。

ともあれ、香織が幼稚園に入ると、すぐに子供たちと保母が解放された。

「あなたがこんな面倒なことするから、手間取っちゃったじゃないの、ニセライダーさん」

ゴーグルとマフラーで顔を隠したニセライダーは、ゴーグルを外してニツと笑った。またしても01郎シリーズのロケットだった。

「よく見破ったな。私は01郎シリーズの最高傑作！この世の至宝！超01郎だっ！」

ロケット・ライダーの影響か、ブンブンと両手を無駄に振り回し、ポーズを決めた。

香織は、首をかしげる。

「ちよつと違うかな……。そこは、こつじゃなくて、こーんな感じ」

「こーんな感じ？」

香織のお手本にを真似て、超01郎がポーズを決め直す。

場所柄も手伝って、まるでお遊戯の振り写しだ。

香織は、こないだの真01郎のほうか、本物と自称するだけあって賢かったかな、と思った。

「ロケット・ライダーは、どうして来られないんだ？」

超01郎が訊いた。

「このニュースを知らないからよ。知らせないように情報を制限してるの」

「なるほど。で、君がかわりに来た、と。勇ましいのは結構だが、ロケット・ライダーをおびき出すための、さらな

る餌にされるとは思わなかったのかい？」

「おびきだす餌……？ あたしが？」

「ヒーローは、ヒロインを命がけで護るって、昔から決まってるだろう？」

「なあんだ」香織は笑った。「いまどきのヒロインはね、ヒー

ローだって護っちゃうのよ」

「素晴らしい」

超01郎は冷笑を浮かべると、すっと左手を香織の首筋に当てた。

バチツと首の後ろがスパークして、頭にガツンとショックがくる。香織は、気絶して、超01郎の腕の中に倒れ込んだ。

目が覚めると、香織は豪華な応接室のソファに寝かされていた。キョロキョロと辺りを見回す。誰もいないのを確かめると、そうっと起き出して、ドアに近寄った。

パスワード式の電子ロックだった。香織は、少し考えた。

今までのナナバのネーミングセンスを思つと、このパスワードは……。

「ヒラケゴマ」

と入力して、エンターキーを押した。

ピンと鳴って、あっさり電子ロックが解除される。少年少女名作全集は偉大だ、と香織は思った。

廊下を駆けていくと、廊下の向こうから人が歩いてくる気配がした。香織はあわてて近くのドアにすがりついた。

ノブを回すと、あっさり開く。ドアのプレートも確かめず、香織はその部屋の中に飛び込んだ。

内側から締めたドアにピタリと背をくっつけて、廊下を歩いていく人をやりすごした。

安堵のため息をついて、改めて自分が飛び込んだ部屋の中を見た。そこは薬品の匂いと怪しげな機械に囲まれた実験室だった。

「おや。いらっしやい。可愛いお嬢さん」

室内のどこからか声がした。

「だ、誰っ？」

「わしじゃよ、わし」

実験台で、様々な種類の灯りが点灯していた。蛍光灯や白熱電球は言うに及ばず、オレンジのナトリウム灯、蒼白い殺菌灯などだ。その中の、直接目で見てはいけません、と公共の場で注意書きが書いてある殺菌灯の前で、何かが

ゆらゆらとゆらめいた。

「そこに、誰がいる？」

香織は目をこらした。

「ふうーむ。まだまだじやのう……」

また声がして、実験台の前の空間がグニャグニャと歪んだ。

透明な皮を脱ぐようにして、一人の老人が現れた。いかにも科学者といった感じの、俗世間とは一線を画した風体の男だ。

香織が驚いて声も出せずにいると、老人は香織の方を見て柔和に笑った。

「光学迷彩の開発中なんじゃがな……。どんなライトを当てられても透明人間でいるというのは、思いの外骨が折れるわい」

透明人間になる服の研究中らしかった。

「あの、もしかして、麻生ハカセですか？」

テニイレタイトの工場で、麻生ハカセがどうのこうのとメガネの神経質そうな男が言っていた。もしかしたら、と思っていたのだ。

「いかにも。わしが麻生礼太郎じゃ」

「じゃ、やっぱり、礼二郎のお父さん？」

「礼二郎？ ……ああ、そうそう。そういう息子があったわ。ふわっふわっふわ」

「あっ、あの……。あたし、五歳のとき、公園に突っ込んできたトラックから礼二郎くんに助けて貰った香織です」

「おお。そうじゃった。あのときは、ちょうどサイバネティクス・レプリの最終調整に入ってたのう。どこかに実験体はいないものかと思っていたところだったのじゃ。いや、なかなか親孝行な息子じゃて」

「……って、はあ？」

香織は言葉を失った。負い目を感じている香織を氣遣つての台詞とも思えない、浮き世離れた発言だった。

「そついえば、もう何年も、あのバカ息子の顔は見とらんわ。まあ、穂菜華がついとる。大丈夫じゃろう」

穂菜華と聞いて、香織の心臓はドキンと跳ね上がる。

「穂菜華さんって、ハカセの奥さんですか？」

「ふわっふわっふわ。あれは、ロボットじゃよ。わしの造った01号シリーズを見てくれたかな？ あれの前身じゃ」

「穂菜華さんが、ロボット……？」

にわかには信じられないほど、あの家の中に居る穂菜華は、あの家の雰囲気合っていた。とても素敵な女性に思えたのだ。

「まあ、礼二郎の死んだ母親をすこしモデルにしたことは事実じゃがな」

そう言っただけ、麻生ハカセは懐かしげに目を細めた。その表情から、ハカセが亡くなった奥さんをとっても愛していたことが伺えて、香織は少しだけホッとした。

「でも、礼二郎って、いつも寝てばかりなんですけど、昔からですか？」

「ふむ。あやつレプリは熱生産量も熱消費量も膨大でな、電子部品から発生する熱を放散するための冷却装置をフル回転させるには、眠ってバッテリーを充電しなければならんのじゃ」

それで、ああも滑稽なほどに寝コケていたのかと、香織はようやく納得した。

思わずハカセと話し込んでしまい、肝心なことを聞くのを忘れていたことに香織は気づいた。

「そういえば、ここ、どこですか？」

「さあ。わしは場所はよく知らんが、ナナバの本部じゃろう？」

「じゃろう……って、ナナバに軟禁されて、兵器を開発させられてるんじゃないんですか？」

「いやいやとんでもない。わしは、招待されたんじゃ。好きな研究をしてもいいとも言われた。特に強制されることもないし、脅されることもない。設備は立派だし、資金の心配もいらん。科学者にとっては夢のような場所じゃよ」

香織は開いた口がふさがらなかった。

「ハカセは、ナナバがなにをしているのか知ってるんですか！ ナナバは、人の心を操って、社会を混乱させて……」

礼二郎は、あなたが造った01郎と戦っているんですよー！」

ハカセは、ほう、と目を丸くした。

「なんじゃい、01郎たちを破壊したのは礼二郎じゃったのか……。いや、見事見事」

「どうやら、ハカセは本当になにも知らされていないらしい。だがそうすると、厄介なものを造ってしまったかもしれんて……」

「はじめてハカセの表情が曇った。」「ロケット・ライダーなるロボットをやっつける秘密兵器を造ってくれと依頼されてのう……」

「ロボットじゃないわ！　それが礼二郎よ！」  
「ううむ……」

そのとき、基地内に警報が鳴り響いた。

『ロケット・ライダー潜入！　総員、戦闘配備！』

香織は、驚いて顔色を変えた。

「うそ……。礼二郎、あんな体で……」

反射的に、香織は廊下に飛び出そうとした。

「まあ、まあ、若いもんはせっかちでいかん」

ハカセは泰然自若だ。

「どうしても行くというなら、これをもって行きなさい」

「は？」

言いながら、ハカセは、さきほどの透明人間になる服を掴んで持ち上げた。空間がゆらゆらと波ガラスを通したように歪む。

「名付けてスガタキエール！　わしの最新作じゃ！」

香織は、ガクツと力が抜けるのを感じた。ナナバとロケット・ライダーの、一連の妙なネーミングは、この親父のせいだったのか。

香織は、自分で造った秘密兵器を子供が宝物を披露するように嬉しそうに見せびらかすハカセを、宇宙人でも見るような目で見つめた。

ロケット・ライダーは、痺れBB弾を発射するショットエアガンを片手に、群がる敵をうち倒しながら基地の中を進んでいた。

ついさつき、香織を拉致したというメールを受信した。

穂菜華が執拗に止めるので、彼女のメインバッテリーを外して家を飛び出した。だが、キガメールの影響でレプリ部品の熱を放散できない今、どのくらいの時間、活動できるかは、賭だった。手足の電子部品が焼き切れるのが先か、生身の脳が熱でやられるのが先か。

香織……。

廊下の壁にもたれて、ショットシェル・カートリッジを交換した。

「ふはははは！　そこまでだ！　ロケット・ライダー！」

高らかに笑いながら、超01郎が登場した。

「また、出やがったな……」

ロケット・ライダーは、うんざりしたようにつぶやく。

「我こそは、秘密結社ナナバ、最高にして最後の至宝！　超01郎だっ！」

ロケット・ライダーは、超01郎が腕を振り回してポーズを決めている間に、右手の人差し指で真つ赤な輪をくるくると回し始めた。輪になった強力磁石だ。

「電腦クラッシュヤー！ 磁気蒸着円月輪！」

ヒュン、ヒュン、と続けざまに強力磁石を超01郎に向かって投げ放つ。赤く塗られた円系の磁石が、超01郎の体にペタペタと丸印をつけた。

「うわあああ！」

超01郎は悲鳴を上げた。さもありません。あれは、スクラップ工場で車を運ぶクレーンなどに使われるほどの磁石だ。それを持つてくるのは、手足に電子部品を使っているロケット・ライダーにとっても命がけだった。

超01郎は、床の上でピクピクと痙攣し、やがて完全に機能を停止した。

ロケット・ライダーは、なおも作業員を麻痺BB弾で動けなくしながら先へ進んだ。

ほどなくして、基地の中心部、巨大なバナナの紋章が掲げられた広間にたどり着いた。バナナの紋章の下に、奥へ通じるドアがある。そこがボスの部屋だ。

ロケット・ライダーは、壁に持たれて荒い息をついた。

その一瞬の間をつかれ、何者かに殴り飛ばされた。ロケット・ライダーは床に体を打ち付けながらも、敵の正体を見定めようと首を巡らせた。

そこには、さきほど機能を停止したはずの超01郎が勝ち誇ったように立っていた。

「詰めが甘かったな、ロケット・ライダー。言っただろう？ 私は、超01郎だ！ ふはははは……」

ロケット・ライダーは、ふつと意識が遠のくのを感じた。だが、このままここで気絶してしまつては誰がナナバを叩くのか。誰が香織を護るのか……。

「礼二郎になにすんのよっ！」

不意に、香織の声が響いた。

ブンッ！ 空間に、光の剣が閃く。

「はははは……はは？」

超01郎の笑い声が、ポーンと切断された首とともに遠ざかっていった。

超01郎の切断された首は、遠くまで飛んでゴトンと落ちた。首ナシになったボディのほつも、膝からガシャガシャと崩れ落ちる。

「きゃー。爆発するうっ！」

香織の声が叫んだ。こうなった場合、次にどうなるかは経験則で知っている。

「香織？」

姿が見えず、声だけの存在に向かって、ロケット・ライダーは呼びかけた。

「こっちこっち」

ロケット・ライダーは、腕を何者かに掴まれた。掴まれている右手首が、透明になってゆらゆらしている。

「へへへ。あたしあたし」

香織は、顔をすっぽり覆っていたフードを上げて、顔だけ出して見せた。その様子は、まるで宙に浮いた生首である。

香織は、ロケット・ライダーを引っ張って、廊下の角を曲がった。それを待っていたかのように、超01郎が爆発する。二人は身を伏せて、爆風をやり過ごした。

「麻生八カセに会ったよ。このスガタキエール、貸してくれた。それから、これ」

香織は、ロケット・ライダーにドリンク剤の瓶を示す。

「キガメールの中和剤だって。体、辛いんでしょう？」

「麻生礼太郎が？」

ロケット・ライダーは、表情を曇らせた。

「早く飲んで」

香織の手を振り払うようにして、ロケット・ライダーは立ち上がった。

「俺は、あいつの助けは借りない」

「だって、お父さんじゃない！」

香織も続いて立ち上がる。スガタキエールから顔だけが出ているので、ひどく不気味だ。

「礼二郎！」

香織はもう、彼のことをロケット・ライダーとは呼ばなかった。自分のことを心の底から想い、いつも護ろうとしてくれていたのは、幻想のヒーローなんかじゃない。普段、寝てばかりいる、天然寝ボケな麻生礼二郎だ。

「なんじゃい。相変わらず、意地っ張りじゃのう、礼二郎」  
背後の声に振り返ると、八カセがのんびりと廊下を歩いてくる。

「ここは、いい研究所だったんじゃがなあ……」

八カセはやれやれとため息をついた。

「ボスを倒すなら、あの奥の扉じゃ。だが、あの扉の封印を破ると、この基地は自爆モードに入る。部屋に入った者

は生きては戻れんかもしれん。それでも行くかね？ 礼二郎

礼二郎は、ハカセを睨んだ。そして、香織を振り返る。

香織はスガタキエールを脱いでいた。

「早く逃げな。このじーさんがいれば、安全にここから出られるだろう」

「あたしも行く！」

「だめだ」

「礼二郎！」

礼二郎は、ふうと息をつくど、ウルトラマンみたいなヘルメットを脱ぎ捨てた。乱暴に頭を振る。玉の汗が髪の毛を伝い、キラキラと飛び散った。

礼二郎は、もう香織のほうは見ず、ゆっくりと奥の扉に向かつて歩き出した。

「じゃあ、わしらも行くかね、香織ちゃん」

ハカセは、香織の手をとり、もと来た廊下を戻ろうとした。

でも、香織には礼二郎一人を残していくことなんかできなかった。

「ハカセは、礼二郎のお父さんなんでしょう？ だったら、どうして息子を一人で行かせるのよっ！」

香織は爆発するように叫んだ。

ハカセは、ふっと笑った。

「息子だから、じゃよ。他人様のお子さんを危険にさらすわけにはいかんじゃろう？ だから、香織ちゃんは、わしが連れてここを脱出せねばならんのじゃ」

「そ……んな……」

香織は、ふるふるとかぶりを振った。

泣きそうな顔で礼二郎を振り返る。赤いマントが翻っていた。

その刹那、香織の目に、信じられない光景が映った。

男が、銃を構え、礼二郎の背中を狙っていた。メガネをかけた細身の男だ。あの男は、テニイレタイトの工場で、見た覚えがある。

考えるより早く、香織は反応していた。

男の構えた銃の射撃線上に、身を躍らせる。

オレンジ色のマズルフラッシュが閃いた。

全てが、スローモーション・フィルムの中の出来事のようにだった。

香織は、胸に衝撃を受け、空中を吹っ飛んで床にたたき

つけられた。

礼二郎が振り返った。ハカセが叫んでいた。

耳に聞こえる音が、ひどく遠くなったような気がした。

これは……夢？

目が覚めれば、隣の席で、いつものように礼二郎が眠りこけているのだ。そんな彼の寝顔を、幸せな気分で見つめるのだ。

遠のいていた音が、ゆっくりと香織の耳に戻ってきた。

でも、体はひどくだるくて指一本動かすのも億劫だ。

「香織っ！」

香織は、礼二郎の腕の中にいることに気が付いた。ちょっと嬉しかった。

「複製製造弾（デュオ・スラッシュャー）じゃ」

ハカセが神妙な顔でつぶやいた。

「いつたい、誰が香織を撃ったんだ！」

「おまえは知らんではない」

「くそっ！ ふざけてんじゃねえぞ！」

思わず、礼二郎は片手でハカセの白衣の襟を掴み上げる。

「わしが説明せんでも、ボスを倒せば嫌でもわかる。それ

よりも、今は香織ちゃんを救わねば……」

「礼二郎……」

香織はかすれた声で呼びかけた。

「礼二郎の体、熱いよ。熱、下がってないんだね。ちゃん

と薬飲んでね。だって、ハカセ、本当にロケット・ライダー

が礼二郎だって知らなかったんだよ……」

「じゃ、なんで俺がサイボーグだってナナバが知って……」

香織は薄く笑った。

「わかるよ、そんなの。あたしも、真01郎との戦い見て、

そうじゃないかって思ってた……。でも、それがあたしの

せいだったなんて、すごくショックだった。ごめんね、礼

二郎……。ごめんね……」

「香織！」

香織は、ふっと意識を失った。

「親父……」

礼二郎は、父を見る。

「死んではおらん。ただ……。彼女はデータの世界に捕ら

われてしまった」

「データの世界？」

「まったく、親の言うことは素直にきくもんじゃ。香織ちゃん

を救いたければ、おまえがしゃんとせねばならんのだ

う！」

「よく言うぜ。でも、香織のことは、意地を張った俺の責任だ。香織を護るつもりなら、あんたへの意地なんか捨てるべきだった」

ハカセは、ニヤリと笑った。

「もって行け」

ハカセは、キガメールの中和薬と、さきほど香織が超01郎を倒した光の剣を礼二郎に渡した。

「なんとまあ、しばらく見ないうちに、生意気になりおつて……」

礼二郎は、立ち上がると中和薬をぐいっとあおり、瓶を捨てた。パンと床が鳴った。

左手で、長さ三十センチくらいの棒を勢いよく振る。

びゅも！ 光の剣になった。

「親父、香織を頼む」

そうして、礼二郎は、再び、ボスの待つ奥の部屋へ向かって、ゆっくりと歩き出した。

礼二郎は、奥へ通じるドアを開け放った。ドアをくぐると、礼二郎の背後でドアが勢いよく閉まった。そして、基地が自爆モードに入ったことを告げるアラームが鳴り響き、赤色灯が点滅し始めた。

礼二郎の行く手には、狭い通路が続いていた。彼は、光の剣を携えたまま先へ進んだ。

奥の部屋はドーム型だった。ドクドクと壁が脈打っていて、まるで生き物の内部のようだ。礼二郎は周囲を見回した。だだっ広い、脈打つ壁の角に、体中をコードに繋がれた何者かが壁に半分体をとけ込ませるようにして存在していた。礼二郎は駆け寄った。

そいつは猿だった。だが、普通の猿とは微妙に違う。どこか人に進化しているようにも見えた。

猿の体のいたるところから、うねうねと生き物のようにコードが伸びていた。コードの先は、脈打つ壁だ。猿は、眠るように目を閉じている。「ここは、まるで、巨大な繭か、子宮の中のようだ」と礼二郎は思った。

「な……んだ、これは……？」

礼二郎が茫然と立ちつくしていると、猿の横の空間に、ぼうつと光が集まり始めた。

驚いて身構えると、そこに背の高い、神経質そうな男が

現れた。丸いメガネを鼻にひっかけた優男である。

『ナナバ・ワークスによこそ、ロケット・ライダー……、いえ、麻生礼二郎くん』

なにもない空間から突然現れた男は、唄うように言った。  
「誰だ……？ きさま……」

礼二郎は目を細めた。胸の辺りで、激しく警鐘が鳴っている。こいつはヤバイヤツだと本能が知らせている。

優男は、左手の中指でメガネをずり上げて酷薄に笑った。  
『薄情ですねぇ。……忘れましたか？ 兄を』

我を忘れて、礼二郎は立ちつくした。

遠くで爆発音が轟いている。ナナバ基地のいたるところで自爆装置が作動し始めたようだ。だが、礼二郎は、その場で石になってしまったかのように、動けなかった。

巨大な爆発音と紅蓮の炎を吹き上げて、ナナバの本拠地は崩壊した。様々な陰謀を繰り広げ、世界征服を目論んでいた秘密結社は、ロケット・ライダーたちの手によって壊滅に追い込まれたのだ。

その光景を、麻生礼太郎は無言で見届けていた。車の後部座席で死んだように動かない香織に、視線を向ける。

ナナバ・ワークス……。

秘密結社ナナバの崩壊は、真の地獄の使者を呼び覚ますことになったのだった。

## 第六章 あたしのココロを見せちゃうゾ！

漆黒のドレスを着た香織と、純白のロケット・ライダーの衣装を着た香織が、電脳空間で戦っていた。

二つに分裂し、データの世界に捕らわれてしまった香織は、わけもわからず戦い続けていた。この電脳空間に来てから、黒の香織は、自分でもわからないうちにナナバ・ワークスのボスと呼ばれていた。白の香織は、ナナバの陰謀をうち砕くために奔走するロケット・ライダー・H2Aだ。

香織たちは、あらゆるネットワーク、あらゆる電子の海を渡り歩いて激しい戦闘を繰り広げた。

そして、その様子を、注意深く監視している人物がいた。

その男は、脈打つ壁の繭の中で、コードに繋がれた猿とともに戦う香織たちを見守っていた。上背があり、丸いメガ

ネをかけた黒づくめの男は、香織にデュオ・スラッシャーを撃ち込んだ張本人だった。

礼二郎は、自宅に帰り着いた。庭にバイクを止めると、穂菜華が心配顔で飛んできた。家を出るときにバツテリーを外した穂菜華が動いているということは、麻生礼太郎が帰っているということだ。

あのあと、礼二郎は学校の屋上で目覚めた。爆発したナナバの基地から、数十キロは離れた場所だった。彼は、自分がどうやってそこに来たのか、まるで覚えていなかった。ナナバの基地の奥の、生きているように脈打つ部屋の中で、礼二郎は兄と名乗る人物に会った。

兄……。

そして、ナナバ・ワークス……。

そして、データの世界に捕らわれてしまったという香織。

「れいくん……」

穂菜華が、礼二郎のボロボロの格好を見て、うるうると瞳を潤ませた。

「お風呂、用意しますね」

そう言って、きびすをかえした。

その背中に、礼二郎は訊いた。

「親父は？」

穂菜華は、ふわっと振り返った。

「離れの地下に。香織さんも一緒にです」

「ありがとう。穂菜華」

礼二郎は、母屋には上がらず、そのまま離れに向かった。

離れの地下に降りて、地下の実験室に入る。

「遅いのう。いったい、いつまで寝とったんじゃ？」

入室した礼二郎を振り返りもせず、礼太郎はパソコンの画面とにらめっこしていた。

「俺のこと、心配しなかったのかよ？」

「あの部屋が安全なのは知っておる。あれは電腦世界とリアルワールドの中間に位置するとても不安定な閉じられた繭だ。場のエネルギーが集まった場所とシンクロし移動する。おまえは異質だ。そのうち吐き出されると思っておったわい」

「あ、っそ」

礼二郎は、実験室のソファでキャラクター柄のパジャマを着て眠っている香織の側に歩み寄った。そっとひざまずく。

「言つとくが、着替えさせたのは穂菜華じゃぞ。そのかわいいパジャマも穂菜華の趣味らしい。わしの穂菜華は、そんな少女趣味じゃなかったんじゃがなあ」

わしの穂菜華というのは、礼二郎の母のことだ。

「香織……」

礼二郎は、香織の手を握りしめた。

「香織ちゃんが撃ち込まれたデュオ・スラッシュャーは、人間を善と悪、表と裏、のような相反する概念によつて分裂させ、電脳空間に脳内の記憶を転写してしまうものじゃ。」

ま、データは整理したほつが電脳空間で動きやすいからな」

礼二郎は、礼太郎の説明を背中で聞いた。

「物知りだな。まさか、それもあんたが作ったなんて、言うなよ」

「いかにも、わしが作った」

礼二郎は立ち上がった。クツと拳を握りしめる。

「まあ、わしを殴るのはいつでもできる。先に話を聞け」

礼二郎は、拳を握りしめたまま礼太郎の傍らに歩み寄つた。

「奥の部屋で、俺の兄だという男に会つた。その話か？」

「そうじゃ。あの男の、電脳空間での通り名は香蕉（シャソジャオ）。中国語でバナナという意味じゃ」

「またバナナか……。なんだって、そうバナナにこだわるんだ？」

礼太郎は、少し笑つた。

「それは、おまえにも責任がある」

「ああ？」

「母さんが、おまえたちを妊娠していたとき……。いや、妊娠すると味覚が変わり、普段、嫌いだったものばかり毎日毎日、口にすることがあるんじゃが、それが、母さんの場合……」

「バナナだった？」

「当たり前じゃ。もう、来る日も来る日もバナナバナナで、わしゃもう、二度とバナナなど見たくないと思つたものじゃ」

「マジかよ……。で、今、おまえたちって言つたよな？」

礼太郎は、うなずいた。

「おまえたちは、双子じゃつた。だが、一人は死産。それが礼一郎じゃ」

礼二郎は、目を細めた。

世界を見ることもなく灰になる運命だつた我が子を不憫

に思った麻生礼太郎は、その幼い記憶をデータ化して電腦空間に解き放った。やがて、赤ん坊だった礼一郎のデータは、電腦空間ですべてのものを吸収し、成長した。

そうして彼は、電腦界のアンダーグラウンドを取り仕切る電腦テロ集団、ナナバ・ワークスを結成した。実体を持たず電子の海を泳ぎ続ける彼の目的は、自分を受け入れなかつたりアルワールドへの復讐なのかもしれない。

「兄貴……か。どうりで、俺を呪い殺しても足りねえって感じだったぜ」

礼二郎は、香織を見やった。

「ナナバのボスは、体中をコードで繋がれた猿だった。あれの意味は？」

「電腦空間から、生体にデータを取り込む実験をしたんじゃない」

「猿が……進化してた」

礼太郎はうなずいた。

「データが複雑すぎて、猿は異様な進化を遂げ、やがて電腦空間に取り込まれた」

礼二郎は、脈打つ壁に体の半分を呑み込まれた姿勢で眠っていたコードだらけの猿を思いだした。だが、あれが猿ではなく人間の脳だったら、もう少し事情は変わってくるかもしれない。

「ちよつと待てよ、そんなに詳しいってことは……、あんたが、香蕉（シャンジャオ）に、肉体を与えようとしたのか？ ナナバの本当のボスは、あんたなのか？」

「穂菜華は、最後まで礼一郎が不憫だ、申し訳ないと言い続けて死んでいった……。わしゃ、穂菜華の願いをかなえてやりたくてのお」

礼太郎の言うお涙頂戴な台詞になど、礼二郎は耳を貸さなかつた。

「よく言つぜ。あんたのことだ。もし、電腦空間のデータをダウンロードして人間がつくれるなら、すげえと思つただけに決まってる」

「ま、まあ、それはそれとして、だ。秘密結社ナナバのボスじゃが、それはあの猿に間違いない。あの猿は、生きて、思考し、電腦を持った者たちに指示を出しておつた。無論、わしも兵器を造つたし、香蕉（シャンジャオ）が全く噛んでいないわけでもなかつたが……」

「01郎の他にも口ポットが？」

「なにもヒューマノイドタイプだけが電腦を持つわけでも

ないじゃろう」

「なるほど」

コンコンと実験室のドアがノックされた。

「れいくん、お風呂用意できたわよ」

かちやっとドアが開き、穂菜華が顔を覗かせる。やわらかな笑顔でニコツと笑った。

礼二郎は、礼太郎を見た。

「いいから言ってこい。わしのほうは、もう少し時間がかかる」

礼二郎は、穂菜華にまわりつかれながら、母屋に戻った。

いつものれいくんじゃないのね？ 怖い顔してるわよ？ 怪我はしていない？ お熱は下がったの？ 辛くなったらいつでも言ってね？ 夕飯はなにがいいかしら？ あのお嬢さん、あんなところで寝かせてもいいのかしら？

礼二郎は、脱衣所までついてきた穂菜華の肩をぐいっと抱き寄せ、その耳元でささやいた。

「心配かけて、すまなかった。この一件が片づいたら、もとの礼二郎に戻るから……」

礼二郎は、穂菜華の額にキスをする。

「はい……。マスター……」

スツと憑き物が落ちたように穂菜華は大人しくなり、礼二郎に頭を垂れると台所へ戻って行った。

「ごめん。穂菜華……。都合が悪くなるとリスタートかけるのって、ずるいやな……」

礼二郎は、穂菜華の背に詫びた。

風呂でさっぱりした礼二郎は、もう一度、離れの実験室に戻った。礼太郎が香織の頭に電極を貼り付けている。

「まさかとは思うが……、あの猿と同じ実験をするんじゃないだろうな？」

コードに繋がれ、脈打つ壁に呑み込まれ、異形の進化をとげたナナバのボスの姿が、礼二郎の脳裏をちらついて離れなかった。

「心配するな。あれからわしも研究を重ねた。それに、今回は、おまえにも働いて貰う。二つに分裂した香織ちゃんを元に戻すには、データを融合させねばならん。ダウンロードするデータにゴミが入らぬよう、見てきてくれ」

「わかった」

「なんじゃ、今度は素直じゃな」

礼二郎は、ふっと大人びた笑みを浮かべた。

「……俺には、異形化した猿を愛し続ける自信はないからな」

礼二郎は、驚いたように礼二郎を見た。

「ほう」

礼二郎は、電極のついたヘルメットを礼二郎に渡した。

「ツールはデータで送っておく。電脳空間とはいえ、データを破壊されたら脳死に陥る可能性のあることを忘れるな」

「で、俺はどうすればいい？」

椅子に腰をかけ、礼二郎はヘルメットを被った。

「わしの開発したデータ融合弾薬、カオリモドールを二人の香織に撃ち込むのじゃ。銃は、S & Wの44マグナム。かつこいいぞ」

礼二郎は、うなずいた。

「ところでな、礼二郎。香織ちゃんとは、もう、ちゅーぐらいしたのか？」

唐突な話題の転換に、礼二郎は面食らう。

「ああ？」

礼二郎は、白い髭をなでつけながら楽しそうに笑った。

この男が、悪巧みをするときの、昔からの癖だった。

「あんた、なにか細工したな？」

「ふわっふわっふわ。心配いらんよ。なに、データの正確性を期すための処置じゃ。ま、ちよっとしたサービスじゃな。しつかりやれ、息子よ」

なんとなくひっかかるものを感じながら、礼二郎は電脳世界へダイブ・インした。

電脳空間は、宇宙と同じだ。上下左右の定義がないので、自分でそれを設定し、目を回さないようにしなければならぬ。

礼二郎は、ロケット・ライダーの姿で電脳空間に浮いていた。頭の中に、礼二郎の声がガンガンと響く。

『礼二郎、聞こえるか？ 香織ちゃんたちは、原子力発電所のラインに侵入している』

「ああ？ どーでもいいけど、もう少しポリウムを絞ってくれ」

かまわず、礼二郎はがなりつづけた。

『香蕉（シャンジャオ）が計画したサイバー・テロだ。原発の制御系システムに侵入し、冷却水を抜いてしまえば、

炉心溶解を起こすことも可能じゃ」

「なんで香織がそんなこと？」

『忘れたのか？ 香織ちゃんは二つの人格に分裂している。』

白と黒、明と暗、光と闇、善と悪！』

「なるほど。香蕉（シャンジャオ）の計画に、黒いほうの香織が協力するってわけか。厄介だな」

『浮標（ブイ）を撃つ。それを目印にして香織ちゃんを捜せ！』

礼二郎がぐるりと見回すと、仰角三十度、九時の方向に浮遊する礼太郎の顔が現れた。そいつは、ゆらゆら揺れながら二カニカ笑っている。

「嫌な浮標（ブイ）だな……くそ」

猛烈にやる気を削がれながらも、礼二郎は二カニカ笑う礼太郎の顔を次々と追いかけた。

香蕉（シャンジャオ）は、脈打つ壁に取り込まれ、眠ったままの猿に語りかけた。

「礼二郎が来たみたいですね。家族団欒といきましょうか……。母さん……」

香蕉（シャンジャオ）は、ふわりと猿の頬を撫でると、電腦空間に消えていった。

礼太郎の顔をした浮標（ブイ）を追っていた礼二郎の前に、突然、香蕉（シャンジャオ）が姿を現した。

「とうとう、ここまで来ましたか。無事に帰れる保証もないのに」

「そうだな。おまえは、天の采配で生を拾った俺を、殺したいほど憎んでいるだろうからな」

「天の采配？ もし、双子のどちらかが生後間もなく死なねばならなかったことを采配と呼ぶのなら……。でも、この世界には神はいません。あるのはただ、0と1。単純なパルス信号だけです」

「0と1……。礼一郎か……」

「まったく、麻生礼太郎のネーミングセンスには頭が下がりますよ」

礼二郎は、破顔した。

「違う。だが、それは、この世界の理を名に持つおまえが、この世界の神たる存在だと言っているわけだな？」

香蕉（シャンジャオ）は、薄く笑った。

「バレましたか……。今、私になにを考えているかわかり

ますか？ 私には力があります。ここであなたのデータを破壊し、リアルワールドのあなたの体に、私のデータをすりかえることも可能なのですよ」

「そして、オーバーフローして異形の進化を遂げる礼二郎になるのか？ ソツとしねえな」

「確かに、私はデータを増幅しています。でも、適度にそれを切り離せばいいだけのことです」

礼二郎は、うつむいた。

「オフクロのデータをダウンするときに、そのワザ、使えばよかったのにな……」

香蕉（シャンジャオ）は、黙って礼二郎を見た。

「麻生礼太郎が話しましたか？ 母、穂菜華のことを」

ナナバのボスである異形化した猿は、穂菜華のデータをダウンロードし、オーバーフローしてしまった結果の産物だった。

赤ん坊のデータを電脳空間に移した男が、妻のデータで同じことをしたとしても不思議はない。

「いや。言えねえだろ？ 普通。でも、まあ、なんとなく……な」

「そうですね。あなたは、母の子宮の中で、だんだん冷たくなっていく私をずっと抱きしめていた。あの場所を共有したのですから、わからないわけはありませんでしたね」

香蕉（シャンジャオ）は、すっと左腕を掲げた。

「湿っぽい話は終わりにしましょう。結局、あなたは私を再び殺すために来たのでしょうか？」

香蕉（シャンジャオ）の差し上げた掌に、星くずの煌めきが集まったかと思うと、一瞬にして中世の騎士が腰に下げていたような両刃のソードが現れた。

礼二郎も、真似をして左手をかざす。反りの浅い、抜き身の日本刀になった。

「時代劇の好きな麻生礼太郎の趣味ですね」

「どうやらこれも、送ったツールらしい。」

香蕉（シャンジャオ）は、ソードを腰ために構え、ブン、と水平に振った。

もの凄い勢いで剣が礼二郎に迫る。

礼二郎は、間一髪で後方に飛び、それをかわした。手にした日本刀を見よう見まねで構える。ゲームのキャラクターなんか、格好良く額の前に握りを寄せ、手首を返して構える、アレだ。

素早く踏み込んで袈裟に斬り下げる。白刃の残像が、中

空で弧を描いた。

香蕉（シャンジャオ）はソードを水平に構えて礼二郎の撃ち込みを受けた。

ガキツと鳴った瞬間、刃物同士のデータが交錯して、刀とソードが十字架の形で融合した。

データの世界は、不思議がいつぱいだ。予測不可能なところでバグが出る。

「あちゃ〜」

礼二郎は、柄を離した。

香蕉（シャンジャオ）は、十字架型に組み合わせた武器を乱暴に振り回す。細身の外見に似合わぬ蛮行だ。

礼二郎は後ろにトンボを切って、距離をとった。舞うように回転しながら、腰のベルトの後ろに挟んだS&Wを引っこ抜く。装填されているのは六発。香蕉をもとに戻すためのカオリモドールが三発。データを破壊する力を持つウイルス弾が三発。

礼二郎は、シリンドラをスイングアウトさせた。装填されているのはカオリモドール。香蕉（シャンジャオ）には効果がない。後退しながらシリンドラを回転させ、手首のスナックプを使って元のように収めた。ウイルス弾が、次に引き金を引いたときに発射できる位置にくるよう、弾の順番を変えたのだ。

礼二郎は、流れるような動作で香蕉（シャンジャオ）に照準した。かすかなためらいが、指先を震えさせた。

礼二郎は、息をつめてトリガーを引き絞る。

ウイルス弾は、香蕉（シャンジャオ）の心臓に命中した。

「ば……かな……」

香蕉（シャンジャオ）は、信じられないという表情で胸に開いた穴からこぼれ落ちていくデータを見つめた。それは、0と1、オンとオフのキラキラ光る電気信号だ。

虹色に輝きながら拡散していくデータをなすすべもなく見つめて、香蕉（シャンジャオ）はかすかに笑った。

「兄さん……」

かすれた声で、礼二郎はつぶやいた。

香蕉（シャンジャオ）は、左手で胸を押さえ、ちらりと礼二郎に視線を向けたが、なにも言わずに背を向けた。そして、トボトボと歩き出し、どこへともなく消えていった。

香蕉たちの大乱闘により、世界中のネットワークは混乱のルツボだった。黒の香蕉が、原子力施設を執拗に狙い、

白の香織がそれを必死に阻止する。

あわや全世界の原発がメルトダウンの危機に陥ったとき、香蕉（シャンジャオ）を駆逐した礼二郎が香織たちのもとに駆けつけた。

「香織っ！」

礼二郎は、S & Wの弾丸をカオリモドルにセットし直し、二人を狙って素早く撃ち込んだ。

二人の香織の輪郭がぼやけたかと思うと、白と黒の二人が互いを求めるように抱き合い解け合う。ゆらゆらとゆらめくデータが再び結実し、分裂していた香織は、もとの一人に戻っていった。

が。

「きゃー……っ！」

香織は、脳天を突き刺すような悲鳴を上げた。

礼二郎は、ポカンと口を開けたまま、悲鳴を上げてうずくまる香織を見つめている。

あろうことか、香織は、なにも身につけていなかった。いわゆる、すっぱんぼん、というヤツだ。

「酷い！ 酷いよ！ 礼二郎のエッチっ！」

感動の再開で、熱き抱擁が待っているようなシーンのはずなのに、助けに来たヒーローがケチヨンケチヨンに罵られる結果になった。

礼二郎が、データに正確性を期すためとか、サービスとか、ごによごによ言っていたのはこのことかと思つて、礼二郎はやれやれとため息をついた。

礼二郎は、肩のマントを外し、しゃがみ込んで泣きべそをかいている香織の肩に、そっとかけてやった。

赤いマントをギュッと胸の前で抱き込んで、香織は立ち上がった。不自然なマント姿から白い足が覗いていて、一糸まとわぬ姿よりもさらに刺激的になった。

鼻血を吹きそうになって、礼二郎は、香織に背を向けた。「と、とにかく、早く戻ろう」

その、礼二郎の背に、ふわっと重みがかかった。香織があられもない姿で背中から抱きついたので。

うわうわうわ……。

体に来たした変化を悟られないように、礼二郎は目を閉じて深呼吸した。

コードに繋がれて眠る猿の足元に、男が倒れていた。そこは、脳空間とも、リアルワールドとも微妙に違う生き

た繭だった。

香蕉（シャンジャオ）は、サラサラと光る砂になって、  
少しずつ消えて行く。

「母さ……ん。もとに戻してあげられなくて……ごめ……ん……」

異形の猿に向かって伸ばした指先の輪郭がにじみ、ぐずぐずになって光の粒に変わっていった。

香蕉（シャンジャオ）は、そうして母の子宮に還った……。

礼二郎は、離れの地下の実験室に戻って来た。目を開け、ヘルメットを脱ぐのももどかしく、側でほこほこ喜んで  
いる礼太郎に詰め寄った。

「あれはなんの真似だよ！ ったくっ！」

白衣の襟を掴んで締め上げる。

「ふわっふわっふわ。まだまだ青いのう」

殴る気も失せ、礼二郎は香織の眠るソファに歩み寄った。

「う……ん」

香織が身をよじる。

「さあて、わしは、穂菜華とお茶でもしてこようかの」  
聞こえよがしに言って、礼太郎は実験室を出ていった。

どうやら、あれでも、気をきかせたつもりらしい。

礼二郎は、香織の傍らに跪き、そっつと顔をのぞき込む。

香織の臉がかすかに震えた。

「香織」

優しく呼びかける。

香織は、ゆっくりと目を開けた。

「礼二郎……」

香織は、小さな声で囁く。うるんだような瞳で礼二郎を  
見上げた。

「ありがとう。礼二郎が来てくれて、嬉しかった」

「ああ」

「あたしね、ロケット・ライダーのときのかっこいい礼二  
郎も好きだけど……。ぼーっとしてるときの礼二郎も好き  
だよ」

「香織……」

香織は、クスツと笑って、静かに目を閉じた。

このシチュエーションで目を閉じるということは……。

礼二郎は、急に高まった動悸を抑えて、そっと顔を近づ  
けた。

唇と唇がかすかに触れ合う。

その瞬間。

「ぶひゃん！」

香織はくしゃみをして、二人は互いのおでこをゴツンとぶつけた。

「あた」

礼二郎は、額を押さえる。

「ごめん」

香織は首をすくめ、半身を起こした。

二人は顔を見合わせ、どちらからともなく笑い出した。

「香織の花粉症、俺がきつと治してやるよ」

「ココロミエールは、もう嫌よ」

「わかってるって」

ひとしきり笑って、礼二郎は、香織の隣に腰を下ろす。

笑いながら香織の肩を抱き寄せた。

香織は礼二郎の肩に頭をあずける。

礼二郎は、もう一度、顔を近づけた。

香織は目を閉じた。

「あ、俺、もうだめ……」

礼二郎は、切なくささやいた。反射的に、香織はそのまま押し倒されるのを覚悟した。

が。

ぼて……。

急に、膝が重くなって、香織は目を開けた。

膝の上に上体をつつぷし、礼二郎が寝息をたてている。本当に、電池が切れたみたいなの寝付きの良さだ。以前、礼太郎が言っていた。彼の電子部品から発生する熱を放散するための冷却装置をフル回転させるには、眠ってバッテリーを充電しなければならぬのだと。

きつと、ずっと突っ張って、無理をしていたのだろうか。

香織は、膝の上で無防備に寝コケている少年の、サラサラの髪をそつと撫でた。次に目を開けたとき、彼は、また、いつもの、ちょっと気弱で優しい礼二郎に戻っているのだろうか……。

平和な日常、それは膝の上の心地よい重さだ。

香織は、幸せで豊かな気分だった。そして、こんなひとときがずっと続けばいいと、心の底から願っていた。

了

『The スニーカー』 企画物 南條セトラ著

[sakka.org](http://sakka.org)